

命を照らす者 ～ウルトラマンメディス～

X2愛好家

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

かつて地球を守護したウルトラマンカイナに続き、飛来した第二の巨人ウルトラアキレス。

彼の激闘の裏で、光の巨人と再会を果たす男が居た。

オリーブドラブ様の執筆作品

【ウルトラマンカイナ】の特別編にて開催された読者参加企画。

そこに登場したキャラクターにスポットを当てたスピンオフ作品となります。

許可を得ての公開となります。

原作リンク

←←←←

<https://syosetu.org/novel/1360>

目次

追う者、追われる者【前編】	1
追う者、追われる者【中編】	15
追う者、追われる者【後編】	29
呼ぶ者、呼ばれる者【前編】	45
呼ぶ者、呼ばれる者【後編】	61
招く者、拒む者【前編】	85
招く者、拒む者【中編】	100

## 追う者、追われる者【前編】

青の星、水の星、生命あふれる星。

様々に呼ばれる太陽系第三惑星【地球】。遙か太古から生命体による食物連鎖が繰り返され、多くの営みが生まれては消えていった破壊と再生の星。

その星の中に生まれた種の一つである【人間】は、その人間にとって気の遠くなる時間、想像もつかない年月を掛けて進化を重ね、やがて地球を代表するかのような生命体へと変化していった。

生まれ故郷である美しき地球で生きる為、地球の自然環境を利用する技術を生み出し、また地球の力に頼らない技術すらも編み出そうとしていた。やがて地球を飛び出し、謎多き漆黒の宇宙にその手を掛けるようにもしていた。

だが、それを許さぬ者もまた存在する。それを利用しようとする者も、人間が汚した地球を守ろうとする者も。それは怪しき獣であり、宇宙からの来訪者であり、侵略者でもある。そして人間同士が完璧に調和しているとも言えない。

そんな火種を抱えたまま、外なる脅威に怯えたまま明日を生きなければならぬのか。否、人はいがみ合うだけではない。手を取り合い互いを理解し、共に立ち向かう事ができるのもまた人なのだ。そして侵略者が居るのなら、手を貸してくれる協力者も存在する。

人間を愛し、共に戦い、共に学ぶ、そんな協力者が。地球の遙か先に輝く光の国から我らの為に。来たぞその名は――

【ウルトラマン】



「この辺りか？」

「ええ。こっち側は被害が少ないみたいね」

山中を進む二人の男女。コスプレイヤー以外の一般人はまず着用しないような「制服」の上にプロテクターを装着し、物々しい機材と

物騒な銃器をそれぞれ装備している。

「本当なら今日休みだったのにい」

「仕方ないだろ。シルバーブルームの一件でピリピリしてる所に今回の隕石だ。新しい円盤生物の可能性も捨てきれない以上、動ける俺らが動くしかない」

「オビ真面目過ぎ〜」

「リルが気を抜き過ぎなただけだ」

オビとリル、互いにそう呼び合う男女は、地球を防衛する組織「BURK」の隊員。「とある宇宙生物」による襲撃により、隊員が人質に取られ、現在BURKと共闘している「ウルトラアキレス」も退けられるという最悪一歩手前の事態が発生した。それが解決して一ヶ月、警戒態勢で神経が逆立っている所に届けられた「地球への落下コースに入った隕石」の報。本来は非番の二人に調査の命令が下ったようだ。

「つとと、急に反応しちゃってさあ・・・！」

「武器は構えておけ」

ウンともスンとも言わなかった機器が急に反応を示す。弛緩していた空気は霧散し、BURK隊員としての張り詰めた雰囲気纏う二人。オビは最初から保持していたBURKガンHSを握り直し、リルも探査機材から手を離してBURKガンとBURKエッジLSを構える。徐々に荒れてきた地形を慎重に進むリル、その隙をカバーする形で警戒姿勢のオビ。

「見事に粉々ね・・・」

「ただ隕石が落ちただけ、なら運が悪かったで済むんだがな。人的被害が無かったのは不幸中の幸いか」

二人が発見したのは小規模なクレーター。その中心地から飛散したと思われる破片が、そこかしこに転がっている。

「とにかく本部に報告だな」

「そうね」

通信機を起動し、状況を報告するリルと周囲を警戒するオビ。

「・・・」

そのオビすら気付かない位置から二人を、そして落下地点を見詰める影があつた。「それ」は視線を外すと、一瞬の内に去るのだった。「っ」

「——なので回収を・・・オビ?どうしたの?」

「いや、何か・・・」



「何なんだ」

度々発生する怪獣による被害、それから立ち直りつつある街中。行き交う人々を眺めながら、ベンチで独り言を溢している男が居た。

【鶴千 契】今は非番なのか私服だが、外星の調査にメンバーとして抜擢されるBURK隊員である。

(あの外星調査から違和感が拭えん・・・記憶も曖昧な部分が多い)

【ホピス】と呼ばれる惑星の調査。半年前に行われたそれから、消えるどころか日に日に増していく「違和感」に悩む契。

(本当に部分的な記憶喪失なのか?本当に成果無しだったのか?セイバーには戦闘機動を取った形跡もあった。隊長達も負傷していた。情報統制なら引き下がったが、あの場で何かがあつたのは間違いない)

(何があつた?)

洞窟の崩落に巻き込まれ、岩塊の下敷きになつたらしい契を含めた男性隊員たち。戻ってきた際には「全部終わっていた」かのような雰囲気であり、何があつたか情報を探ろうとしても、民衆の不安をいえずらに煽れない、という名目で不明瞭なまま。知らないならそれで良い、と言わんばかりの秘密主義にシルバールーメの一件で下されかけた判断も加わり、元から低い上層部への信頼が下限を突き抜けそうになっている。

「チツ・・・」

苛立ちを舌打ちで少しだけ吐き出しベンチを立つ契。こういう時は体を動かすに限る、と休みにも関わらず基地へ足を向ける。同じB

URK隊員の士道 剣にスパ—リングでも申し込む気だろうか。  
「ん？」

大通りの方が騒がしい事に気付く。遠目でも分かる程度には人集りが出来ており、お祭り騒ぎという雰囲気でもない事から街のイベントという訳ではないらしい。「興味」が大半の野次馬に、「恐れ」や「嫌悪」のような悪感情が混じっているのも見て取れる。

「警察官か・・・まあいい、ちよ—ど暇していたしな」

しまいには警察官まで現れ、BURK隊員として無関係とは言えなくなってきた。誰に向けるでもない言い訳じみた独り言と共に人集りへと向かう契。すまない通してくれ、と人垣を掻き分け、人々が注目している先へ辿り着いた。そこで目にしたのは――

「子供？だが・・・」

怯えたように背筋を丸め、早足で大通りを抜けようとしている小さな姿。子供が小走りしているだけなら気にも留めないが、その様子と容姿が人の目を集めているだろう事は直ぐに分かった。

後ろ姿でも分かる程に白い髪。服装は現代の地球文化では見ないようなデザイン。おまけに裸足で、何かから逃げるように走っている。

「下がってくださいーい」

「BURKの鶴千だ、状況は」

「あつ、しつ、失礼しました！」

制服を着ていないから分からなかったのだろう。野次馬として下げようとした警官にBURK隊員証を兼ねたデバイスを見せ、状況の説明を求める契。だが、警官も「様子のおかしな子供が居る」「人が集まりすぎて危ない」程度の通報で出動した為、詳細は分かっていないようだ。

「こちらで追う。怪我人が出ないように整理してくれ」

「はいー」



「・・・！」

「あー、敵意は無い、ぞ?」

数分後、大通りから少し外れた公園で少女と契が睨み合っていた。厳密には契は屈んで視線を合わせようとしており、言葉通りに敵意は一切無いのだが、少女は警戒を解こうとしてくれない。更に言えば契は子供の相手は苦手な部類の人間である。

(駒門さんの方が良かったか・・・今から連絡して直ぐに現着できるかは分からないが)

自覚できるレベルの仏頂面よりも、包容力のある女性の方がこういう場面は良いのでは、と気付いたのは少女に睨まれてからの契だった。

「そうだな・・・俺は鶴千 契。この地球を守っているBURKという組織の隊員だ。おま・・・君は?」

「・・・」

(駄目か)

苦手で不器用ながらも意志疎通を試みる契。だが少女は頑なに言葉を発しない。

「あー・・・その動物を追いかけた、のか?」  
「!」

少女の腕に毛むくじやらが抱かれているのが見えた。街中を走っていた時から持っていたのか、この公園でようやく捕まえたのかは定かではないが、可能性の一つとして話題に出してみる。少女の目付きが鋭くなった辺り地雷だったようだが。

「すまん、動物なんて失礼だよな。名前はあるのか?」

愛着のあるペットか何かなのか、と考えた契。失言のフォローを兼ねてほんの少し話を逸らす。今の自分に出来る最大限の微笑みを浮かべながら。20年強生きてきた中で、今ほど表情筋を使った事は無いだろう。普段の俺はどれだけ仏頂面なんだ?と思わずにはいられない契だった。

「・・・」

「むう・・・」

密かな努力も功を奏さず。毛むくじやらを指差したのも悪手だっ



たか、その動物らしき何かを更にギュツと抱きしめ警戒を強めてしまった。

「君は一人で来たのか？ご両親・・・パパとママは？」  
「！」

今までになく激しく動揺する少女。また地雷を踏んだかと焦る契。子供どころか人付き合いが苦手な男はここに来て更に追い詰められていた。

「っ！——！」  
「何だ？どこの言語だ？」

何かを伝えようとしているらしいが、その内容が全く分からない。世界規模の防衛組織B U R Kに所属している為、日本語以外もそれなりに理解できる契だが、少女の言葉は今までに履修してきたどの言語にも当てはまらない。

（可能性の一つとして思い付いてはいたが、異星人なのか？それなら辻褃が合う）

第一印象として侵略宇宙人ではない、と思える少女。ここまで地球の環境に怯えるようでは斥候すら務まらないはず。何よりこんな子供に本命はおろか尖兵を任せられるのか？と考える。勿論この幼い姿、あるいは怯えた仕草が偽装だったり演技だったりする可能性も捨ててはいない。

（目的は何だ？俺に何を伝えようと——）

契が思考の深みに嵌まりかけた瞬間。少女の背後で光が瞬いた。

「くっ」

「！？」

突き飛ばす訳にもいかず、覆い被さるように少女を守った契。その右肩には火傷のような傷が刻まれていた。

「安心しろ、この程度で死にはしない・・・アイツだったら問答無用で蹴り飛ばしてたんだがな」

何処かで誰かがくしゃみをした気がする。

無事な左腕で少女を庇いながら、光が飛んできた方向を睨む契。あ

えて隙を晒したつもりだが、最初の一発以降が飛んでこない。襲撃者は逃げたのか、はたまた本当に気を緩める瞬間を狙っているのか。「この借りは必ず返してやる」

上着の内ポケットから通信機を取り出し、所属部隊に連絡を取る。その間にも油断なく警戒していたお陰か、襲撃者は姿を見せなかった。やがて到着した隊員達に保護され、契と少女はBURK日本支部へと向かうのだった。



「士道くんと殴り合い宇宙以外で、ここのお世話になるの久々すぎない?」

「かもな」

BURK日本支部基地。その内部の医務室にて怪我の手当てを受けている男と、手当てをしている女。男は謎の襲撃者から少女を守った契であり、女は医務室に詰めている女医である。名は「築与 真矢」。

「ところでさあ」

「言いたい事は分かる。可能なら頼みたい所だ」

「あー・・・契で無理ならあたしにも無理よ」

「・・・」

怪我をしていない方の腕、契の左腕をガツチリと掴んで離さない少女が居た。心なしか真矢を睨んでいるようにも見える。

「いい加減に離してくれないか・・・」

「――」

「今のは、嫌って言ったのかしらね?契を取ったりしないから安心しなさいな」

言葉が通じていないのもあってか契を離そうとしない。やはり異星人なのか子供にしては握力がやや強く、若干の痛みを左腕に感じ始めた契。ついでに言えば毛むくじやらの推定宇宙生物も抱えたままの為、熱くなってきた。

「この調子で離れないから聴取も出来ん」

「だからあたしに、というか医療班に丸投げしてきたのね……治療のついでに手伝えって契もまとめて」

「だろうな」

「はあ……あたしはカウンセラー兼業だけで取り調べのプロって訳じゃないんだけど。んんっ、まずは自己紹介からね。改めてはじめまして、あたしは真矢よ。マ、ヤ」

「……マ、ヤ？」

幼くもしつかりとした発音。真似をして言葉を発する程度は出来るようだ。

「そうーで、こっちは——」

「ケイ」

「もう覚えたのか」

「さつきからあたしが何回か呼んでたしね。さて、あたしはマヤ、こっちはケイ、じゃああなたは？」

順番に名前を聞かせ、それと同時にそれぞれを指差していく真矢。最後に少女を指差しながら質問をする。

「ムム。ム、ム」

白髪の異星人の少女こと【ムム】。名前を知れただけでも大きな前進だろう。やはりこういう場面では女性の方が強いな、などと少し落ち込んでいる契だった。

「名前はオツケー。問題は……」

「来訪目的と襲撃者に関して、だな」

正直なところ、これを聞き出すのが最も難しいだろう。名前はフィーリングとボディランゲージで何とかあったが、目的や人間関係は明確に「会話」をしなければ伝わらない。

「襲われてたらしいけど……この子、親御さんは？血縁じゃなくても保護者とか。まさか一人で他の星から逃げてきた、って訳じゃないわよね？」

「現場では見当たらなかった。血縁に絞ってこの子と似たような白髪赤目に同じような服で搜索しているが、連絡が無い以上手掛かりすら

掴めていないんだろう」

「えーっと、通じるかな・・・ムムちゃん、お父さんとお母さんは一緒にじゃないのかな？」

「？」

先程のボディランゲージよりも詳細に、手話を交えてどうにか会話を試みる真矢だが、ムムは疑問符を乱舞させて首を傾げる。やはり何かを言っている事は分かってても、その内容までは伝わらないようだ。

(両親・・・待てよ、あの時は・・・)

真矢の言葉でムムとのやり取りを思い出す契。あの公園で対面した時、確かに「両親」について聞いている。そしてムムの様子が急変し、何かを伝えようとしていた所で襲撃を受けたのだ。

(お父さんとお母さん・・・違う、俺はたしか)

「ムム、ママとパパは？」

「！」

お父さん、お母さんではなくパパ、ママと言い、それに反応したのだ。恐らくパパとママのどちらかがムムにとって大事なキーワードなのだろう。

「ママ！——！！——！！」

「それを調べろ、と？」

相変わらずママ以外は意味が分からないが、発言と同時に右腕を契に押し付け始めたムム。その部位には、何らかの機械が嵌められていた。ブレスレットにしては大きく物々しいそれには赤い発光パーツが存在し、囚人のような鎖が伸びている。

「ママが地球と同じ意味かは微妙だけど、お母さんが着けたのかしら？みまもり機能とか、防犯ブザーみたいなきらみで」

「可能性はあるな。弘原海隊長、鶴千です」

通信機を起動し、上官である弘原海に推測混じりではあるが現状を報告する契。謎のブレスレット調査の為に技術班がスタンバイしたが、やはりムムが契から離れようとせず、若干時間が掛かったのだ。た。

▽▲▽▲▽▲

「ハアツ・・・！ハアツ！」

岩を乗り越え、木々を避け、川で水飛沫を上げながら走る一人の女性。その表情は恐怖に染まっており、しきりに背後を振り返っている。何者かに追われているようだ。

「・・・ムム！」

スタミナの限界に達したのか、一際大きな樹木に背中を預けて座り込んでしまう。女性が荒い呼吸と共に発したのは、契が保護した異星人の少女の名だった。

「ッ！」

突如、女性が休んでいた樹木が爆発を起こす。その衝撃で投げ出され、強く胸を打ってしまう女性。痛みを堪えながら再び走り出した。『フッフッフッハッ・・・』

逃げる女性の背を見つめ、不気味に嗤う【何か】が居た。

▲▽▲▽▲▽

「発信器？」

「ええ。追跡装置の類いかと」

医務室から移動し、技術班が詰めているBURK日本支部基地のラボ。契と真矢以外に触れられる事を嫌がるムムを落ち着かせ、ブレスレットを解析にかけて数分。結果は装着者の居場所を探るための追跡装置と判明した。

「定期的に信号を発しているようです。その信号を受信する親機の存在も確実にしようね」

「ふむ・・・受信元は探れないか？」

「やっていますよ。あと、その子の声も録音データで貰ったので、翻訳してみます」

「頼む」

「ケイ・・・」

「安心しろ。ここに居る限りは安全だ……と言つても伝わらないのか」  
不安げなムムの頭を優しく撫でる契。その様子を見た真矢は不思議そうにしている。

「契が異星人に優しいなんて、明日は槍でも降るのかしらね」  
「どういう意味だ」

「何て呼ばれてるか知ってる？ 能面蛮族とかクールバーサーカーとか、あとMA殲滅ニキだとか散々言われてるわよ？」

ちなみにMAはMonster & Alien、つまり怪獣と異星人は殲滅する男という意味である。くだらん、と溜め息を吐いた時、信号の傍受を行っていた研究員が声を荒げる。

「鶴千隊員！」

「どうした」

「ムムちゃんのブレスレットと同じ反応をキャッチしました！」

「何だ?!」

研究員の手元のモニターを覗き込む契。そこには山岳地帯のマップブレータが映されており、ムムのブレスレットと同じ反応を示す赤い光点が重ねられていた。

「同じ反応……！ブレスレットは二つある？」

（まさか……狙われているのはムムだけじゃない？）

「ママ！」

真矢にしがみついていたムムが契に駆け寄る。今にも泣き出してしまいそうな顔で。

「ケイ！——！ママ、——！」

翻訳を待つまでもなく、ムムの言葉が分かる。

「ママが危ない。ママを助けて。」

とうとう大粒の涙を溢し、契に体当たりするように抱き着き懇願する。大事な家族が死んでしまう、どうか助けてほしいと。言葉が通じない中で、必死に助けを求めたムムの涙が契の服を濡らす。

「約束する、お前のママは必ず助ける。真矢！」

「ムムちゃんは任せて」

戦士が戦場へ飛び立つ。



「・・・」

『そう気負うな鶴千。あの子とお袋さんを助けてやりたいのは俺も同じだからな』

『俺達、でしよう?』

基地から発進し、空を切り裂くかのように飛ぶ鋼鉄の猛禽が二羽。単座型でやや先行しているのは、契が操縦している「Gホーク Type A」。その後ろに位置しているのが複座型の「Gホーク Type B」である。現在のパイロットはBURK日本支部の実働部隊隊長 弘原海と、コ・パイロットとして同乗している女性隊員 駒門琴乃の二名。

『にしても、お前にこんなコネがあつたなんてな』

『他の機体とはまた違う感触だな。それに速い』

「元々俺がテストパイロットをしていたので。向こうに頼んで二機とも出してもらっただけです。俺から言わせてもらえば、いきなり乗りこなすお二人の方が信じられませんよ」

契の友人はそう多くないが、数より質、とでも言うのか濃いメンツが殆どである。その中の一人にBURKと提携している企業連合のトップが居る。より多くのデータを取る事を名目に今回の一件で実戦投入され、ついでとばかりに複座型のType Bも隊長格二名に貸与されたのだ。

(あの人の場合は「家族」の部分に思う所があつたんだろうが)

ビジネスマンとして辣腕を振るう仕事一筋の男。だが、その正体は何よりも家族を大事にする超が付く程の身内バカだ。赤の他人どころか生まれの星が違う家族にも関わらず、理不尽に踏みにじられそうな命を見捨てる事ができない優しい男でもある。恐らく問題が出ないよう、様々な根回しと幾つものお題目を掲げて契にGホークを貸し出してくれたのだろう。

そんな不器用で優しい男の心意気に応える為、そしてムムの涙を拭

う為、契はGホークで飛ぶ。

「この反応は？」

契のType-Aが前方に何かを捉えた。ほぼ同時に弘原海と駒門のType-Bもそれを確認する。

『少なくともBURKや自衛隊じゃない』

『鶴千！直ぐ撃てるようにしとけよ！』

『もう撃てますよ』

Gホーク両機に緊張が走る。楯円を組み合わせたような形状の飛行物体を視認した瞬間、「それ」から光線が放たれた。

『撃ちやがった！』

『地表に・・・？つ、生体反応！誰かを狙っているのか！』

『やらせるか！』

接近してきたGホークではなく、何故か地表に向けて光線を発射した飛行物体。Type-Aよりも探査能力に優れたType-Bが捉えたのは人間に近い生体反応。何者かが地表の誰かを狙って攻撃したのは確実だ。

「ッ！」

今さらGホークに気付いたのか、より上空に離脱しようとする飛行物体。だが、そんな悠長な退避行動を許す契ではない。Type-Aの機動性を存分に発揮し、飛行物体の背後にピタリと張り付いてみせる。

「墜ちろー！」

照準を合わせ、Type-Aのビーム砲のトリガーを引く。

「チツ、しぶとい・・・！」

『部下にばっか良いカツコはさせらんねえな！』

『発射！』

Type-Aのビームは直撃こそしたものの撃墜には至らず。黒煙を上げながら、それでも逃走しようとする飛行物体に対し横から回り込んでいたのは弘原海と駒門のType-Bだ。小回りが利かない代わりに、現場での移動指揮室としての役割を持ち、更に搭載武装の火力も高いType-Bから高出力のビームが放たれる。



『見たか！・・・なっ!?!』

『消えた!?!』

Type-Bのビームも見事に直撃し、航空機としては致命傷を負ったはずの飛行物体だが、墜落するのではなく光学迷彩のように姿を消してしまった。

『クソツ！どこ行きやがった!』

「レーダーからも消えるのか・・・!」

『後詰めのセイバーが来る。我々は地上に降りて、対象を保護しよう』  
「了解」

敵性宇宙人は取り逃してしまっただが、ムムの親族と思われる人物は無事ようだ。遅れて到着する予定のBURKセイバーに宇宙船の警戒と搜索を任せ、地上に降りる契達。そこで待っていたのは――

## 追う者、追われる者【中編】

「おおーい！お袋さんよおー！」

「それだと隊長の母君に聞こえますが・・・」

宇宙船を撃退し、地上に降りた三名。ムムの母親を搜索するが中々見付からない。

「ポイントは間違っていない。そう遠くに行つたとも思えん・・・何処だ」

「うおっ!?何だこりゃ」

ムムの為にも、と焦りを募らせる契だったが、弘原海が何かを発見する。集まる契と駒門の二人が見たのは、岩石に付着した液体。それも青白い物。

「この地域特有の・・・という線は薄いか」

「付着の仕方、乾き具合・・・飛散したのか？」

「これ手形じゃねえか？」

弘原海の言葉を聞き、もう一度岩を凝視する契。確かに言われてみれば、この液体が着いた手で岩に触れた跡のようにも見える。

「・・・ん？」

思考をまとめている契の聴覚が何らかの音を捉えた。そう離れていない場所から、ガラツという音がした。まるで小石や砂利が崩れたような音が。

「隊長」

「分かつてる」

弘原海と駒門の二人にも聞こえていたのだろう。BURKガンを構え、ハンドサインで駒門を音がした方向にとっての死角へ回らせる弘原海。即座にそれに応えた駒門も静かに、かつ迅速に展開を行う。契も同じくBURKガンのトリガーに指を掛け、慎重に音がした岩に近付いていく。フォローが容易な位置に着いた駒門が頷き、岩の影に飛び込む契。彼の視界に映つたのは――

「っー」

「なっ、女・・・？」

口を固く結び、左腕を右手で抑え踞る女性だった。

「鶴千！・・・こいつぁ」

「白い髪に赤い瞳、それに服装も」

「間違いねえ、か」

ムムと同じ特徴を備えた女性。顔立ちも契の記憶に新しく刻まれたムムにどことなく似ている。ムムが成長すれば目の前の彼女のようになるだろうか。

「驚かせてすまない。こちらに敵意は無いんだ」

「？——、——」

「こつちも通じねえか・・・」

BURKガンをホルスターに収め、両手の平を見せて武器はもう持っていない事を示しながら、座り込んでいる女性に目線を合わせる契。だが、ムムと同じく言葉が通じていない。更にこちらと同じく女性の使う言語が分からない。

「どうしたもんかねえ」

「ムムなら分かるかもしれ——」

「ムム!?——!——!——!——」

怯えていた女性が血相を変える。ムムの名前に反応し、弘原海を睨み、契に掴み掛かった。やはり互いに思い合う間柄のようだ。

「落ち着いてくれ。今ムムに繋ぐ」

掴まれ、揺さぶられても無抵抗な契。その様を見た女性も警戒こそ解かないが、少なくとも敵ではないと判断してくれたのだろう。言葉は相変わらず互いに伝わっていないが。

「こちら鶴千、応答を」

『こちらラボ。どうしましたか?』

「真矢とムムはまだ居るか?ムムの母親と思われる女性と接触した。ムムに確認してほしい」

了解しました。と映像通信からフェードアウトする研究員。数秒と経たず映像に別の誰かが映る。ムムを伴った真矢だ。

『・・・ママ?』

「ムム！」

通信中のデバイスにムムが映った瞬間、契の腕に飛び付く女性。そのまま引つたくりかねない勢いでムムに話し掛けています。次第にムムによく似た垂れ目は濡れ、涙が溢れていた。

「ん？」

娘さんも無事で良かったなあ、などと弘原海が男泣き一步手前の顔になっている傍らで、契は自分の腕に半ば抱き着いている女性が気になっていた。正確に言えば、契の腕を掴んでいない方の腕。つい先程まで自分で抑えていた左腕だ。

(青い・・・血か?)

やや青色が強い服装で分かりづらかったが、ポタポタと女性の左腕から滴っている。弘原海が発見した別の岩に付着していたのも、この女性の血液だろう。上空から襲われていた所で別の戦闘機が現れ、ドッグファイトを制して降りてきた。それを警戒して隠れようとした際に岩に触れてしまい、弘原海に見付かったといった所だろうか。

「お、おう・・・なあ、何て言ったんだ？」

「自分にも分かりませんよ。ムムの確認も取れた事ですし、応急処置をして帰還しましょう」

「応急・・・おおい！怪我してんのか！」

先程の男泣き未遂も含め、その熱血っぷりが何処かの剣さんに似ていなくもない弘原海。いつもの毒っ気たっぷりのツツコミをどうか呑み込みつつ、止血を行い包帯を巻いていく。その迷いの無いテキパキとした処置に弘原海も感心している。

「へえ、以外だな。お前はもつと不器用な奴だと思ってたんだが」

「真矢・・・築与医務官に応急処置くらいは出来るようにと厳命されているので。それに、この程度は実働部隊員として出来て当然です」

あつという間に処置を終え、女性の青い血を止血した契。ムムにも同じ血が流れているのだろうか、等と考えながら女性に手を貸しGホークへと戻ろうとする。

瞬間、契が悪寒を感じた。自身の体調不良ではない、明確な【悪意】による凶兆を。

「伏せろ！」

「うおあつ!？」

「隊長!?! 鶴千!？」

奇しくもムムと同じく契に守られる女性、至近距離の爆発で衝撃を諸に受けた弘原海、契より一瞬遅れて「襲撃者」に気付きBURKガンを構える駒門。四者四様の動きを見せる中、駒門とちょうど真逆の位置に姿を見せた襲撃者。

その姿は異星人が地球人の服装を纏い、頭と手首から先が異形と化しているというチグハグなものだった。

『フッフッフツ・・・ハアツ!』

頭から曲がった銃身のように生えている突起部。その先端が光輝くのとほぼ同時に契の周辺地形が爆発を起こす。どうやら破壊光線を頭の突起部から放っているらしい。笑っているかのような不気味な声を発しながら、少しずつ距離を詰めてくる襲撃者。

「クツ・・・おい、大丈夫か?」

「――!」

イヤイヤ、と首を振り、契には分からない言語で怯える女性。この様子からするに「アレ」にずっと追われていたのだろう。契の中に「火種」が灯る。

「俺の目を見ろ」

「!」

そのまま蹲りそうになっていた女性の顔に触れ、若干強引に視線を合わせる契。

「アレは俺がどうにかする。指一本たりとも君に触れさせはしない、ムムの為にも」

「――、ムム・・・」

「鶴千! お前はその人連れて下がれ! ここは俺達で何とかする!」

光線着弾の衝撃から立ち直り、BURKガンを引き抜いて応戦を開始した弘原海。駒門も弘原海と鶴千を援護すべく、BURKガンを連射しながら駆け寄って来ている。

「ここに居てくれ。直ぐに片付ける!」

女性を岩が防壁になつてくれる位置に移動させ、ジェスチャーも交えつつ諭す契。そのまま駆け出し異星人と思われる襲撃者に向かつて行く。

「ちよつ、おい鶴千!」

「ここで始末しないと何処までも追つてきます!」

「つたく、しゃあねえな!駒門!あのバカの援護だ!」

「了解!」

合流した駒門と共に援護射撃を行う弘原海。二つの火線に晒される事を嫌がったのか、あくまで狙いは女性だけであり光線の直撃コースを確保したかったのか、破壊光線の発射を止めて場所を移そうとする襲撃者。だが、その隙を見逃す契ではなかった。攻撃が止んだのなら好都合と一気に距離を詰める。

「ッ!」

『ヌウツ・・・』

BURKガンによる一撃。距離が縮まった事で狙いを付けやすくなったが、襲撃者の身体能力か動体視力が良いのか躲されてしまう――

「どこ見てやがる!」

「そこっ!」

『グオオツ!?!』

契に注目せざるを得ない状況で放たれたのは、弘原海と駒門のBURKガンのビーム。何の打ち合わせも無く、ただ突出した馬鹿を援護する為に撃たれたそれは、見事に襲撃者の両膝をそれぞれ撃ち抜いていた。

「ッラア!」

『グヌツ・・・』

バランスを崩し、地に膝をつく襲撃者。体勢が低くなった襲撃者に対して契が取った行動は、情け容赦無しのカンカキックだった。気の抜ける声と共に倒れ込み、後頭部を強打する襲撃者。

『オオツ!』

「遅い、んだよッ!!」

手傷を負わされた事で契の脅威度を上方修正したのか、即座に上半身を起こし突起部を向ける。だが発射した破壊光線は虚空に吸い込まれ、代わりに胸部へ強烈なエルボードロップが繰り出されていた。

『グッ……ウオオオ……』

「その爪は飾りか？オラ、立てえっ！」

呼吸器や内臓の仕組みが人間と同じか、など契には分からない。だが「生物である以上、ダメージを受け続ければ死ぬだろう」という蛮族思考を持つ契にそんな事は関係無い。これが「あんな蛮族を宇宙に出したら地球人が誤解される」とまで評されたクールバーサーカークオリティである。

「シッ！ッ！ダアッ！」

「た、隊長……」

「あー……」

地球の物か、あるいは地球製に似た物かは不明だが、服を着ていた事が災いした襲撃者。胸倉を掴まれて強引に立たされ、格闘技の型に添っているか微妙なラフラッシュで更に負傷が積み重なる。それを見ている駒門と弘原海は内心密かに同情していた。「鶴千はとにかく格闘戦が強い」と知っているからだ。特に「相手を倒す」事を決めた契を止められる、互角に戦える人間はB U R K内でも片手の指で足りる程しか存在しない。

もし、これがゲームで「ツルセケイ」というキャラクターを相手を選んだ時「それへの対策は何か？どう戦えば良いか？」と聞けば、どんな初心者であっても明確に答えてくれるだろう。

【絶対に近寄らせるな、引き撃ちに徹しろ】と。

『グ……オア……』

「セエアッ！」

弘原海と駒門の両名が引いている中、契は襲撃者を沈めに掛かっていた。渾身の回し蹴りが襲撃者の側頭部に炸裂したのだ。二回転ほどして倒れ伏す襲撃者。フィニッシュムーブを決めた契は、右手を数回スナップさせ襲撃者を見下ろしていた。

「終わりにする」

『ヌウ・・・クアッ!』

「なっ!？」

収めていたBURKガンに再び手を伸ばし、トドメを刺そうとした契。だが襲撃者もやられるばかりではなかった。契が手を止める瞬間を見計らい、半ば自爆同然に破壊光線を地面に向けて放ったのだ。超至近距離での爆発により、吹き飛ばされる契と襲撃者。かなり強引に仕切り直しを図ったらしい。

「くっ!まだ、だッ!」

転がった先で素早くBURKガンを抜く契。この程度の痛みが何だと闘志は全く衰えていない。舞い上がった粉塵を迂回するように弘原海と駒門も動いている。次こそ仕留めてやる、とジグザグに粉塵を突っ切った瞬間――

『グオオッ!?!』

聞こえてくる苦悶の声。契を中心として左右に展開していた両名も困惑している事から、二人が撃った訳でもないらしい。再び膝をついた襲撃者の背後には、離れている為に小さくしか見えないが見慣れたBURK制服があった。



「間に合ったみたいだな・・・」

「山一つ越えていきなり撃ってさあ、見事に命中させた私を誰か褒めても良いと思わない?」

「はいはい、エライエライ」

「煽ってるよねそれ」

軽口を叩きながらもBURKガンのサイトから目を外していないのは男女一名ずつのBURK隊員。隕石の調査に赴き、そのまま回収作業の補助と護衛をしていた鎚打と太刀薙の二人である。

契と弘原海、駒門の三名が発進した際、現地に最も近い増援として移動が命じられたのだ。隕石の落下ポイントと契達が降りたポイントはちようど山で隔てられており、太刀薙の言葉通り山を一つ越えた



所で襲撃者と戦闘を行う三名を発見したのだ。

「後は向こうに任せよう」

「早く帰ってシャワー浴びたいなあ」

「っ！そう簡単には終わらないみたいだ！」

「ちよっ、ウソでしょ!?!」



「コイツは！」

「おいおいマジかよ！ホークまで戻るぞ！」

鎚打と太刀薙による援護射撃で動きを止めた襲撃者。そこに弘原海と駒門の攻撃が命中し、絶命したかと思われた。だが襲撃者はそれでも終わらなかった。今までは全て遊びだ、とでも嘲笑うようにその身体を巨大化させ始めたのだ。

「——！」

「っ、クソッ！」

岩から身を乗り出して叫ぶ女性の元へ走る契。見捨てる等という選択肢は存在しない。

——ギシャアアアアアアッ!!!

契が女性を背負って走り出すのと、襲撃者が巨大化を完了したのはほぼ同時だった。

ギリギリ人間に近かったシルエットは崩れ、二足歩行の怪獣と形容できる異形へと変異した襲撃者。淀んだ青い瞳は、契と女性を確実に捉えていた。

「隊長！鶴千が！」

「俺らが戻ってもやられるだけだ！このままホークを飛ばして援護する！」

一足先にGホークへ辿り着いた弘原海と駒門。スタンバイ状態だったシステムを叩き起こし、離陸と同時に攻撃態勢を整える。

——シャアッ！

「ぐうっ！」

Gホークへ急ぐ契だが、襲撃者、もとい怪獣も易々と見逃してくれない。サイズが大きくなった事で爆発の威力が上がった破壊光線が地形に着弾し、その衝撃で大きく吹き飛んでしまう。

「っ……くっ、おい……大丈夫か」

「……」

弱々しく頷く女性。何とか立ち上がった契だが、怪獣の影が直ぐそこまで迫っている事に気付く。その本体も。女性を降ろしBURKガンで攻撃すべきか？と考えるが、即座に自己満足だけして死ぬだけだと切り捨てる。女性を背負い直し、彼女だけでも逃がす方法は無いか、と思考しながら走る契。

——グオオツ！

先程、契に肉弾戦で痛め付けられた恨みを晴らそうとでも考えているのか、破壊光線ではなくその巨体で踏み潰そうと動いている怪獣。そんな怪獣の愉悦と慢心の隙を突くようにミサイルが着弾した。

「セイバー？この際誰でも良い！」

後詰めとして現着していたBURKセイバーによる援護射撃。撃破には程遠いが、新たな脅威として気を引く事はできたようだ。

『鶴千！今のうちに！』

『やらせねえってんだよ！』

更に完全に起動したGホークType-Bからも高出力ビームが発射される。追加で発射されたBURKセイバーのミサイルも同時に命中し、大きくよろめく怪獣。この隙は逃せないと全力疾走する契。だが——

——グウ……キシヤアアツ!!

『効いてない!?!』

『執念深すぎんだろ！逃げろ鶴千え!!』

「っ!?!」

「——!」

直ぐさま体勢を戻し、立て続けの攻撃も無視して契を追い始めた怪獣。ミサイルとビームの効果が薄い、という訳ではないのだが、弘原海の言ったように驚異的な執念で契を抹殺しようとしているのだ。

厳密に言えば契が背負っている女性を、だろうか。そのついでに邪魔者である契も殺そうというのだろう。

(こんな、所で……!)

怪獣としてのタフネスに物を言わせて迫る襲撃者。このままではGホークに辿り着いても、起動している間にお陀仏だ。ここまで来て、こんなに呆気なく終わるのか。

(まだまだ……!まだ終われない!最後の最後まで抗い続けてやる!)

否、断じて否。契の中の【火種】が勢いよく燃え上がろうとした瞬間。

『ダアッ!』

——ギョルアッ  
!?!?!?

裂帛一閃。

怪獣の背後から飛び回し蹴りを放つ何者かが居た。推定60mを超える怪獣を蹴飛ばせる人間など存在しない。それも、前のめりに倒れて契に危険が及ばないよう回し蹴りで横に吹き飛ばす、等と考えて攻撃できる者など。

『フッ!』

『来てくれたか!』

『つたく、遅いんだよ!』

自身はしつかり着地し、倒れた怪獣に対してファイティングポーズを取る巨人。人非ざる超常の存在。深紅のボディに銀のラインが走る宇宙の戦士。

その名は——

「アキレス……」



(あつぶねえ……みんな無事だな)

ちらりと自分を見上げる二人に視線を送り、無事を確かめてから拳を握り直すウルトラアキレス——こと暁 嵐真。

悪夢の始まり、災厄の先触れとなった怪獣戦車とそれを追って現れ

た光の巨人「ウルトラマンカイナ」。彼が地球を去った後、入れ替わりで現れたのがこの赤い巨人「ウルトラアキレス」である。19歳の大学生「暁 嵐真」と一体化したアキレスは、彼と共にBURKの力も借りながら地球を守り続けているのだ。

(さあて、容赦しねえぞこの野郎！)

何故、BURK基地からも彼が籍を置く大学からも離れた山にすぐ現れたのか、そして何故ほんの少し嵐真の機嫌が悪いのか。理由は単純、大学の課題で山の近くに来ていた為である。BURKへの協力で多少は免除されているとはいえ、彼の本分は学業。せっかくの課外活動もすっぱかしたとなれば単位やら何やらが危ないのだ。

『ヤアアア!!』

——グギユウ!?

起き上がった怪獣に対して怒りのジャンプキック。再びゴロゴロと転がる怪獣に追撃の一手。

『デュアツ!』

(トロイレーザー!)

頭部のビームランプから放たれる細い光線。立ち上がろうともがく怪獣の背に直撃し、その小さな爆発痕を刻み込んだ。

(まだまだあ!!)

一気に距離を詰め、怪獣に組み付くアキレス。膝蹴りを数発入れてから振り向かせ、正面を向いた所でパンチとエルボーのコンビネーション。大きく怯ませてから掴み直し、再びビームランプにエネルギーを灯す。

(もういつちよトロイレーザー!——はっ!?)

『へアツ!』

超至近距離でのトロイレーザーで更なるダメージを狙ったアキレスだが、驚愕に動きを止めてしまう。その原因はもちろん怪獣。なんと頭が外れ、腰辺りから文字通り顔を覗かせたのだ。

——ギユアアア!

『グアアア!』

アキレスの左腰に激痛が走る。外れた頭から破壊光線を発し、身体

と組み合つて動けない所に命中させたのだ。更にアキレスの力が緩んだ所へ追い打ちの打撃。先程とは逆にアキレスが地を転がる。

(なっ、なんだアイツ・・・！頭が尻尾みたいに！)

異形の怪獣となつた襲撃者は、更にその姿を異形のものとしていた。腕を前足として地に降ろし、四足歩行の獣のような姿勢を取り、尻尾かまたまた脊椎のように下半身から伸びる部位の先端に頭が着いている。毒針の代わりに頭部を着けた蠍に近い何かだ。

(四つ足になつたから何だつてんだ！)

『フツ！デイヤア！』

驚きこそしたものの嵐真の闘志は揺らがない。頭部の宇宙ブーメラン、アキレスラッガーを手に持ち果敢に斬りかかつて行く。軽く飛び上がったの斬り下ろしで怪獣の頭部を狙うが、ろくろ首のように不規則に動く頭を捉え切れずに終わる。

(くっ、そおッ！)

待つてましたとばかりに突進を行う怪獣の身体。着地して直ぐのアキレスに突撃し、頭を置いてあつた先端部で膝を抉るように体当たり。バランスを崩し、片膝をついたアキレスを更に頭部を狙う。

『シユアッ！』

——ギユウア!?

胴体と首の間、そう狭くはないスペースに一か八か飛び込んだアキレス。その賭けに勝利し、破壊光線を回避した上で胴体部分に光線を誤射させる事にも成功した。

(っ！いつ、てえ・・・)

だが完全に無傷という訳にもいかなかった。攻撃を受けて体勢を崩し、その状態から無理に跳躍した事が祟つて左足を痛めたようだ。傷は怪獣の方が深いだろうが、結果としては痛み分けか。

『グッ・・・！』

(こんなもんで・・・！負けるか！)

スラッガーを握り直し、どうにか立ち上がるアキレス。誤射から立ち直つた怪獣もアキレスに向き直り、威嚇するように首を震わせている。

『背中がお留守だ!』

『援護する! 行けアキレス!』

そこに隙を窺っていたGホークから援護射撃が飛ぶ。後脚の根元にビームが着弾し、煩わしげに頭部をGホークへと向ける。破壊光線が発射される直前、側面に回っていたBURKセイバーからも攻撃が行われる。

(今だ!)

『フツ・・・!』

怪獣の注意がホークとセイバーに逸れた瞬間。アキレスは目の前の空間にスラツガーを固定した。

(本家には程遠いけど・・・食らえツ!)

『ジュアツ!』

ウルトラ念力で固定したスラツガーをエネルギー光弾と共に撃ち出し、その威力を数倍に高める。嵐真と一体化したアキレスの記憶に色濃く残っていた技。嵐真が「本家」と称したウルトラ戦士、アキレスはおろか数多のウルトラマンにとって偉大なる先達であるウルトラセブンが使った技。ウルトラノック戦法だ。

——グギユアアア!?

途中でアキレスが何かをしている事に気付くが、さすがに遅すぎた。鈍重そうな四本足形態に反して身軽なサイドステップで避けようとするが、一瞬遅く避けきれなかった。

(よし・・・のままトドメだ!)

存分に威力を発揮して戻ってきたスラツガーを左手に保持したまま、身体を大きく振りかぶるアキレス。本人の言葉通り必殺のイーリアショットでトドメを刺すつもりらしい。

(っ! 何だ、この感じ——)

チャージを終え、発射姿勢を取ろうとした瞬間。アキレスとなった嵐真の感覚が何かを捉えた。徐々に近付いてくる音も聴覚が捉えた時、背後から「それ」は現れた。

——グギヤオオオオウツ!!!

『へアツ!?!』

(なっ!?何だコイツ!)

大きく跳躍しながら現れ、アキレスに奇襲を仕掛けた巨大な影。イーリアシヨットの発射をキャンセルし、斜め前に転がる事で乱入者の爪を回避するアキレス。集めた両腕のエネルギーを散らしながら、視界に捉えたその姿は【白い獣】だった。

(怪獣!?もう一匹居たのか!)

左前方には異形と化した襲撃者、右前方には突如として乱入してきた白い獣。互いに敵対している素振りや警戒している様子が無い事から、恐らくこの二体はグルだろう。襲撃者の危機に駆け付けて来たのだろうか。

(やるしか、ねえ!)

まず白い獣に先手を打つ為、アキレスラッガーを投擲しようとするアキレス。だが足下から聞こえてきた声に、またしても行動をキャンセルするはめになる。

「よせアキレス!」

(うおっ!?BURK隊員の・・・そこ危ないって!)

「その白い怪獣は——」

「ムムを人質に取ってるんだ!」

## 追う者、追われる者【後編】

「このまま行けば終わるか・・・」

アキレスが模倣ウルトラノック戦法を繰り出す前。巨人と怪獣の戦闘を地上から見上げていた契。戦況は互角といった所だが、傷の深さで見ればアキレスがやや優勢。Gホークとセイバーも援護に入る動きを見せており、イレギュラーが無ければこのままアキレスが押し勝てるだろう。

だが、こういう時ほど起こるものなのだ。

最悪のイレギュラーというのは。

『……い……け——！』

「通信？誰だ」

『けい——、契！応答して！契！』

「真矢？」

何者かがノイズ混じりの通信を送ってきたようだ。次第にクリアになっていく音声が真矢のものだと気付く。

『やっとな繋がった！契、聞いて。ムムちゃんが——』

「ムム!? ——！——！——！」

「落ち着け、と言っても通じんか。すまん」

ムムの名前を聞き、契に背負われたまま騒ぎだす女性。地球と同じ意味があるかは分からないが、女性の唇に人差し指を翳して落ち着くよう促す。幸いにもその仕草は通じてくれたらしく、静かになる女性。真矢に続きを頼むと頷いて返す契。内心は、先程の通信からそこまで長時間経っていない中でムムに何かあったのか、とやや焦っていたのだが。

『ムムちゃんが・・・拐われた』

「何だ!?」

一瞬前の自分の言葉を自分で踏み倒した契。真矢も悲痛な面持ちで契と女性にとって残酷な事実を伝えていく。

『ずっとムムちゃんが抱いていた動物が居たでしょ？宇宙生物だろうとは思っていたのだけど、こっちの想定以上に凶暴で狡猾らしくて……』



「アレはペットか何かじゃないのか！」

『あたしにも分からないわよ！』

つい語気が荒くなる両者。

「っ、すまん」

『ごつちも、ごめん。その宇宙生物が急に外に飛び出して行って、ムムちゃんが追い掛けていったのよ。そうしたら、急に怪獣みたいに大きくなって・・・』

「擬態か急成長か・・・それで、ムムを拐ったというのは？」

『信じられないけど、怪獣の目に吸い込まれたように見えたわ。急に敷地内に現れたから迎撃も遅れて、そのまま何処かに跳んで行っちゃった』

何故B U R K基地を破壊せずに去ったのか、何故わざわざムムを人質に取るような真似をしたのか、破壊工作や捕食が目的なら基地が混乱している間に幾らでも果たせたはずだ。

「クソツ・・・！」

『ごめんなさい・・・何処に向かったかは今調べてもらって——』

「いや、向こうから来たらしい！」

規則的な衝撃音が徐々に近付いてくるのが分かる。契が振り向いた瞬間【それ】は一際大きく跳び上がり、怪獣にトドメを刺そうとしていたアキレスに凶爪を振り下ろしたのだ。

全身が純白の体毛に包まれ、美しい毛並みとは正反対に凶悪な顔をアキレスに向け威嚇するように唸り声を発している。口腔に収まりきらない鋭い牙を剥き出し、長い尻尾をゆらゆらと振っている様はまさに【怪獣】だ。

「奴が・・・」

「——！ムム！」

女性が白い怪獣の左目を指差し叫ぶ。

「分かるのか？っ、まずいー！」

視力が良いのか同族との感応か、何にせよ女性にはムムが捕らわれている事が分かっているようだ。契が目を凝らそうとした時、事情を知らないだろうアキレスが攻撃態勢に入っているのが見て取れた。

万が一、怪獣の左目に直撃でもすればムムの命は無いだろう。全力でアキレスに駆け寄り、声の限り叫ぶ。

「よせアキレス！」

すんでの所で契の声が届き、スラツガーの投擲を中断するアキレス。慌てた様子で契に退がれと伝えようとしているが、続く契の言葉に更なる焦燥を募らせる事になる。

「その白い怪獣は！ムムを人質に取ってるんだ！」

『ハッ!?!』

ムムという名前に覚えは無いだろうが、人質を取っているという言葉に驚愕を隠せないアキレス。契に意識を割いている隙を狙い、怪獣が破壊光線を放ってくる。

『オオッ！デヤアッ！』

下手に着弾させて契を危険に晒す訳にもいかず、スラツガーの腹を向けてガードしたアキレス。何とか防ぎきり、白い怪獣のボディに視線を向ける。

『――！――！――！』

「左目だ！恐らくそこに捕らわれている！」

『フッ！』

何処に捕まえているんだ、と白い怪獣のあちこちを睨んでいたアキレスだが、契の言葉と女性の指が示した先を一際強く睨む。透視能力でも使っているのだろうか。

『鶴千！こっちでも確認した！』

「隊長？」

『通信はこちらでも聞いている。Gホークのシステムで怪獣をスキヤンした』

『どうやらマジみてえだ……！怪獣野郎、ふざけた真似しやがって！』

移動指令室としての機能も持つGホーク Type-B。ムムの母親らしき女性を発見した時と同じく、生体反応のサーチ機能を使い怪獣を調べていたようだ。その結果、真矢の言葉や女性のリアクションが正しい事が証明されてしまったらしい。セイバーが攻撃を止めているのも情報が共有されたからだろう。

(悠長に頭以外を狙っていたらジリ貧だ。かといって二対一の不利をアキレスに押し付けるのも……)

大抵の生物にとって急所である頭を狙えないのは致命的だ。更には言えば白い怪獣の運動能力が高い事は、街と山を越えて来た点で実証済み。動きに合わせられず、無理に射撃を行って左目を誤射などしたら取り返しがつかない。

「どうすれば……!」

「ムム!ムムウツ!」

焦る契、その背から必死に手を伸ばす女性。悲痛な叫びを耳にしたアキレスがついに動く。

『テヤアツ!』

保持したままだったスラツガーを構え、先に異星人が変異した怪獣を仕留めようと飛び出すアキレス。だが彼の行動を咎めるように、白い怪獣がその長い尾をアキレスへと向ける。

——グウツ!

白い怪獣の尾から迸る電撃。遠距離への攻撃手段も持ち、尚且つその威力も中々のようだ。

『ハッ!——ジュアツ!』

電撃をステップして回避し、着地から仕切り直しを凶るアキレス。だが、白い怪獣が見せ付けるように取った行動にアキレスも弘原海も契も、怪獣以外のその場に居る者が驚愕する。

——グルルルツ……!!

『なっ!?あの野郎ツ!』

「……クツツ!」

白い怪獣が、自らの目に爪を突きつけたのだ。鋭い爪が狙いをつけているのは左目。ムムが人質に取られている方の瞳だ。

『クツ……』

アキレスの挙動に合わせるように左目へ爪を近付けていく白い怪獣。動けば人質がどうなるか分かるだろう?と言わんばかりに目と爪を見せ付ける。やむを得ずアキレスもスラツガーを投げ捨て丸腰になり、ファイティングポーズも解いて隙だらけの様を晒す。

——ギシヤアアアアアアッ!!!

——グアアオオウツ!!!

アキレスの戦意喪失を見た二体の怪獣が同時に動く。異星人は頭部から破壊光線を、白い怪獣は再び尻尾から電撃を放つ。

『グアアアアア!』

まともな防御も出来ず、二体の攻撃が直撃し吹き飛ばアキレス。倒れた先でどうにか身体を起こそうとする彼の一部が危険を報せていた。プロテクターの上で輝くカラータイマーが、生命の危機と時間経過を告げる赤になり点滅していたのだ。

『グッ……ウウツ……』

——グルアッ!

ムムを殺傷する構えを解いた白い怪獣がアキレスに飛び掛かる。鋭い爪を突き立て、首を絞めながら強引に立たせる怪獣。アキレスを解放したと思えば、プロテクターや防御されていない部分を引き裂く。爪による攻撃の勢いで背を向けて膝をつくアキレスに対し、白い怪獣は容赦無く追撃を行う。

『ウツ!?グアアアア!!』

——ヴウウウウ……!!

肩と前腕をそれぞれ保護するプロテクターの間、二の腕の部分に噛み付いたのだ。

『止めろお!』

『隊長!下手に攻撃すれば……!』

『くっ……チクシヨウツ!』

GホークもBURKセイバーも迂闊に攻撃が出来ず、アキレスの援護がままならない。現状、アキレスを除いた最高火力を持っているのがGホーク Type-Bだが、万全なコンデイションの怪獣を一撃で粉碎できる程ではない。よしんば白い怪獣を倒せたとしてもムムが巻き添えになってしまうのなら意味が無い。

「ムム……」

「……!」

「なっ!?おいお前——」

ムムを傷付けず救出する方法は無いか、焦りだけが募る契の背中で女性が動いた。ホルスターに収められていたBURKガンを抜き、それを向けたのだ。

「何してるー！」

自分へと。

下顎に銃口を押し付ける形で自分にBURKガンを向けた女性。その表情は涙を流しながら、ぎこちなく笑っているという悲痛なものだった。

「……ムム……。――」

「馬鹿な真似はよせ！ムムもあんたも救う！必ず！」

相変わらず言葉は通じない。だが、女性が言いたいのか今は分かる。分かってしまう。

狩りの標的が自害すれば、それはプライドの高い狩人にとって屈辱になる。女性は自分で自分を殺し、先に逝ってムムを待っていると言ったのだろう。そしてムムを気にしなければアキレスや弘原海達が何の気兼ねなく動く事ができ、戦えると。

――またか

――また見送るだけなのか

――また何も出来ないのか俺は

女性の悲壮な覚悟と諦めを見た契の中にどす黒い感情が沸き上がり、記憶がフラッシュバックしてくる。落ちてくるペンダント、ズタズタに裂かれた衣服、そして怪獣の鳴き声と羽ばたく音。契にとって唯一の家族だった【姉】の最期。訳も分からぬ内に殺され、手を伸ばす事すら出来ずに逝ってしまった。

その最悪の末路を、また俺に見せるのか。今度は守ると誓った二人がまとめて死ぬという結末を。

――この人が、ムムが何をした？

個人的な復讐心と敵愾心とは別の感情が契の中に芽生える。それは黒くドロドロとした悪意ではなく、命を弄び騙す畜生以下に対する

怒りの赤。

——事情なんて知らない

そう、契はこの二人の事を知らない。もしかしたら二人は何かを犯した罪人で、あの異星人は刑罰の執行者なのかもしれない。

——なら許されるのか？

幼いムムが言葉が通じない中で必死に、涙を流して助けを求めた姿を契は知っている。映像越しとはいえ再会できた二人が笑い合い、心から相手を心配していた事を契は知っている。目の前の女性が契の身を案じ、これ以上巨人に怪我をさせられないと自害を選ぶ女性だと契は知っている。たとえそれが諦観から来る間違った優しさだとしても。

「・・・ッ！」

引き金を引こうとしては引けない女性。その指は強ばり、BURKガンを握る手も震えている。今は死の恐怖が勝っているが、いつ取り返しのつかないトリガーを引いてしまうか分からない。

「あんたは生きていて良い」

「！」

「俺が・・・俺達が、終わらせる！」

女性の手からBURKガンを取り上げ、三度ホルスターに収める契。そのまま怪獣に向かって走り出す。その胸の内には燃え上がる炎が渦巻いていた。

——巨人よ、お前達は何なんだ

——人間を憐れむ神なのか？

——人間を嘲笑い、代償を求める悪魔なのか？

「今はッ！どうでも、いいー！」

——どちらでもいい

——踏み躪られる人々の涙が見えるなら

——悪意に弄ばれる人々の声が聞こえるなら

——力を貸せ

「あの時のようにッ!!」

絶えない怒りが火種となり、火種はやがて燃え盛る炎となる。そし

て炎は暗闇の帳を焼き払い、宇宙の彼方を見据える標になる。姿を見せた宇宙から光が現れ、炎の元へと舞い降り力となる。

叫べ、その名を——

「メデイスツ!!!」



くらくて、さむい。だれもいない。ここにいるのはムムだけ。ムムはこのまましぬのかな。さいごにママにあいたかった。ギュッとしてほしかった、あたまナデナデしてほしかった。

ケイとマヤにもさよならいえない。やさしくしてくれたのに、たすけてくれたのに、ありがとうをいえてない。

いやだよ……こわいよ。

たすけて……だれか——

——シユアツ!!!

えっ？



『ヌウツ！デヤアツ!!』

突如現れ、荒地と森林地帯を照らした光。それは瞬く間に巨大化し、人の形をなした。巨人の纏う光が霧散するより早く、怪獣達が気付くよりも速く繰り出された強烈な一撃は、白い怪獣の左目を精確に貫いていた。

『フウツ……!』

「——、ムム！」

怪獣の目を貫き、何かを引き抜いた巨人はそれを地上の女性の近くに降ろす。一瞬見えた生々しい瞳に嫌悪感を露にする女性だが、次の瞬間には怪獣の瞳が光の粒子へと解け、女性が探し求めていた少女が現れた。

「……ママ？」

「ムムっ！」

状況が飲み込めないムムに駆け寄り抱きしめる女性。大切な家族の温もりを感じ、次第に涙が溢れてくるムム。悪質な狩人と狡猾な獣に引き裂かれた家族が、ようやく再会できた瞬間だった。

『……』

その様子を見届けた巨人から光が消え、その全貌が明らかになってきた。

引き締まった深紅の肉体を幾つかの銀のラインが彩り、左肩には十字のような文様が存在している。後頭部から一本角が伸び、胸には本来青色の光が灯るカラータイマー。

ムム達に向けるどこか優しげな視線から一転、空気を張り詰めさせる鋭利な視線となった瞳を怪獣共へと向け、片膝をついた体勢から立ち上がる。

(覚悟は出来ているんだろうな……！)

怒号の炎をクールな仮面で隠した地球人、鶴千 契。

またの名を——

【ウルトラマンメデイス】



—— グアウツ!? ギャアアアツ!?

目を引き抜かれるという中々にえげつない攻撃をされたのにも関わらず、衝撃でアキレスから離れただけだった白い怪獣。まるで感覚が無いようにポカンとしていたが、急に左目を掻きむしるように苦しみだす。

(何だ……? 何がどうなって—— いっただあ!?)

急展開に理解が追いつかないアキレスこと嵐真。噛み付かれた左腕を押さえ、異形の怪獣の方を警戒していたがその左腕を叩かれメデイスの存在に気付く。

(いきなり何すんだよ!)

(それで動くだろう。あまり時間は掛けられん、さっさと片付けるぞ)



大怪我をしている部位を悪化させる一撃に文句を言う嵐真だが、それを行ったメデイス——契は平然としている。更に契の言う通り、僅かに動かすだけでも激痛が走っていた左腕が楽になっている。全快ではないものの、戦闘に使う分には問題無い程度に回復しているのだ。

(後で説明してもらおうからな！)

(良いだろう。行くぞ！)

『ジユワツ！』

『ハツ！』

二人の巨人がほぼ同時にファイティングポーズを取り、怪獣に向かっていく。アキレスは白い怪獣へ、メデイスは異形の怪獣へと。

——グルウ……！ガアツ！

——シヤアアアアツ！

『アイヤアツ！』

時間は掛けられない、その言葉通りメデイスのカラータイマーは既に赤く点滅している。白い怪獣の目を引き抜く際にエネルギーを大量に消費したのだ。それでも疲労を感じさせない動きで怪獣に殴り掛かっていけるのは、契の闘志と憤怒が尽きないからだろう。

——グジユウ!?

(そう回避したいだろうな。だが、読めている！)

異形の怪獣の急所はやはり頭だろう。岩石のように硬いボディにいくら打ち込んでも撃破には遠い。かといって右へ左へと不規則に動く頭部は狙いづらく、先程アキレスがスラッガーによる斬撃を外したのがその証拠だ。だが契は訓練を積んだBURKの隊員。絶対的に優位な立場でしか獲物を狩った事の無い狩人の動きを誘導するなど容易い。狩人で怪獣ではあっても戦士ではないのだ。

突起部から放たれた破壊光線を避け、返しの光弾を放って頭に回避を強要させる。頭が動いた先に飛び蹴りを「置いて」おけば、後は向こうから当たりに来てくれる。

(む、合わせるか)



(おおりやあつ!)

『ダアッ!』

——グギヤアアオウツ!

一方、連続して放たれる白い怪獣の電撃を掻い潜り本体に組み付いたアキレス。膝蹴りを数発入れた所で、先程のように噛み付いてくる怪獣を何とか躲す。

(今、コイツは左の視野が無い・・・なら!)

後ろに下がりつつ、ジリジリと位置を調整する。アキレスが狙っているのは、ちょうど白い怪獣の背後に落ちている得物。敵との距離が離れ、これ幸いと姿勢を低くし尻尾からの電撃を発射しようとする白い怪獣。アキレスが、嵐真が狙っていたのはこの瞬間。

(今だ!)

『デュアッ!』

——ギョルアアアツ?!?!?

左目を失い、視覚が狭まった怪獣の斜め後ろから飛んできたのはアキレスラッガー。ムムの為に武装解除して手放した物をウルトラ念力で呼び戻したのだ。ついでにお返しと尻尾を切断しながら。

『ヤアアッ!』

またも身体の部位を失ったのたうち回る白い怪獣。その隙を逃さず背後へ回り込み、短くなった尻尾を力強く掴む。そのまま全力で怪獣を振り回し始めた。

『オオッ! デヤアッ!』

五回ほどスイングした所で思い切り放り投げる。派手に転がり、土煙を巻き上げて止まる白い怪獣の上に異形の怪獣が飛んできて重なった。

『フッ』

どうやらメデイスが投げ飛ばしたらしい。もみくちやになって起き上がれない二体に対し、二人の巨人は頷きタイミングを合わせる。

(イーリアアッ! ショットオッ!)

『ジュワツ！』

(シフリウム光線！)

『シユアツ！』

アキレスとメデイスの必殺光線がそれぞれの腕から放たれ、立ち上がろうともがいていた二体の怪獣に直撃する。光線が消え、一拍おいて大爆発を起こす怪獣。悪質なハンターと狡猾な獣のゲームは、ここで幕引きとなったのだった。



此処は・・・？何だ？俺はいつたい・・・

ムムは？あの人は？アキレスはどうなった。あの異星人と怪獣は

！

.....

っ、誰だ！

—— ツルセ、ケイ……

お前は・・・メデイス？

—— 記憶……戻ってしまった……

ホピスでの事か。

一応、感謝はしておく。ホピスでは隊長達を、今回はムム達を助ける事が出来た。

—— 危機は去っていない

何？

—— 新たな闇は……そう遠くない未来に現れる

新たな、闇……？

—— ツルセケイ。裁定の時が、いずれ来る

なっ、おい待て！新たな闇とは何だ！裁定の時とは！

—— それまでは共に在ろう



「ケイ！——？ケイツ！」

「ん・・・ムム、か？」

いつの間にか岩に背を預けて気を失っていたらしい契。意識を取り戻すのとはほぼ同時に、不安げな少女の顔が目映る。目を覚ました契を確かめると安堵して胸を撫で下ろす少女。メデイスの力を借りて助け出したムムだ。

「今回は届いた、か」

「？」

「ムム！」

駆け寄って来るのはムムの母親らしき女性。そういえば未だに名前も聞いていないな、等とぼんやり考える契。

「ママ、ケイ——。」

「——！」

やはり名前以外は分からんな、と苦笑する契の手を取り慈しむように自分の手で包む女性。驚く契だが、言葉の代わりに精一杯の感謝を伝えようとしている姿を見て悪い気はしない。そこに自分も居るよ、と手を重ねてくるムム。この二人の笑顔を守れたなら命懸けで神頼みした甲斐があつたというものだ。或いは全力で悪魔に魂を売ったか。

『おい鶴千！無事か！』

「隊長？・・・こちら鶴千、何とか生きてはいますよ」

『まったくヒヤヒヤさせやがって！迎えに行くから待ってるよ？良いな！』

「了解、Type—Aの所で待ってます」

今回は始末書何枚になるか、等と反省する気が全くない問題児。立ち上がり、合流ポイント兼Gホーク Type—Aの着陸地点に向かうとする契。ムムを抱え、女性の手を引く姿はまるで父親のようだった。

「——？」

「悪いようにはしない、俺がさせない。君達の安全は俺個人が保障す

る」

「――、――。デイデイ」

「ん?」

聞き覚えの無い言語の中に混じっていた「デイデイ」という単語。それが意味するところは分からないが、女性の表情からして悪い意味ではないのだろう。

「少なくとも猿じゃない事を祈るよ」

「?」

昔のゲームになりつつあるキャラクターを思い出しながら歩く契。ちやうど弘原海と駒門のType Bも着陸態勢に入った所のようにだ。

「二人を案内して・・・の前に隊長と真矢の説教か」

メデイスと一体化しての戦闘による疲れと、この後待っているだろう二体の強敵を思いげんなりする契だった。



ムムとのファーストコンタクトから始まった一件。新たに姿を見せた謎のウルトラマンの調査や、異星人である二人の受け入れ等、慌ただしくなった日本支部。当事者である契と、二人のメンタルケアも兼ねる事になった真矢は特に忙しくしている。

「・・・」

ようやく確保できた休息の時。自室という事もあり、人目を憚らずベッドに身を投げ出して物思いに耽る契。

(メデイスの言っていた新たな闇。それが地球に目を付けた場合アキレスとメデイスで守り切れるのか?)

制服の内側に隠された【それ】に視線を送る契。メデイスとの一体化の際に出現し、いつの間にか内ポケットに入り込んでいた機械。ホピスで一度だけ手にした【ベーターSフラッシャー】に酷似した点火装置。メデイスをイメージしたような、深紅に銀の十字の意匠が施されている。

(あの時以来メデイスの声は聞こえない・・・)

どう呼び掛けても返事をしないメデイス。新たな闇や裁定の時とやらについて聞きたいが、向こうは話すつもりが無いらしい。荒島隊員と叶隊員の二人が地下に籠って何かを作っている話は聞いているが、それも間に合うかどうか。そして間に合ったとして、新たな闇とやらに対抗できるかどうか。

「いざとなれば、俺が・・・！」

気まぐれな巨人のルールなど知った事か。アキレスⅡ嵐真が戦えなくなったとしても、その代わりを務める事に躊躇いは無い。自らB URK隊員の道を選んだ契とは違い嵐真はごく普通の大学生だった。ムムとその母親も日常を壊された被害者だ。彼ら彼女らが普通に暮らせる日々を守るのが自分の使命だ、と決意を新たにした所で呼び出しが掛かる。

『契、ちよつと良い?』

「真矢?」



「どうした・・・ムム?」

「ケイ」

真矢に呼び出され、向かった先はムムとママが保護されている二人部屋。よくよく考えればムムが居るのは当然なのだが、真矢からの呼び出しという事でその可能性が抜け落ちていたようだ。

「用件は?」

「あたしじゃなくて、ほらムムちゃん」

「ケイ・・・ア、アー」

「ん?」

「ア、アライ・・・ガト」

「!」

「ありがとう」と伝えたかったのだろう。

覚えたてどころか本来の常用言語ではない為に発音はかなり怪し

いが、契にはしつかりと聞き取れた。

「俺からも礼を言わせてくれ。ムム、頑張ってくれて、生きていてくれて・・・ありがとう」

「ン！ケイ！アライガトオ！」

古くからの知り合いである真矢すら見た事のない契の笑顔。

一人の戦士は囚われの姫を救い出し、これ以上無い褒美を授かったようだ。

## 呼ぶ者、呼ばれる者【前編】

「大学の調査・・・ですか」

「そうだ。妙なエネルギーが観測されたとかでな」

BURK日本支部基地内、ブリーフィングルームにて。実働部隊の隊長を務める弘原海が部下の一人である鶴千 契に指示を出していた。今のところ張り詰めた空気ではない辺り、警戒レベルは然程高くないようだ。

「妙なエネルギー・・・大学・・・まさか」

「お前もそう思うか？マイナスエネルギーの可能性があるから調べてこい、ってわけだ」

契の中で警戒レベルが一段上昇した。

【マイナスエネルギー】とは、いわゆる【人間の負の感情】の事であり、これが高まり続けると怪獣を呼び寄せてしまう、或いは怪獣そのものが誕生してしまうという厄介極まりない事象だ。かつて地球を防衛していた国際組織であるUNDA、特に極東エリア担当のUGMが手を焼いていたという人心に巣くう闇である。

「観測された日付は？」

「三日前だ。現地も警戒態勢だったが、それから何も起こらなくてな。これ以上学生の不安を煽ると、それこそ怪獣が生まれかねないから直接見てこいとさ」

「なるほど・・・了解しました」

最低限の装備を仕込んで私服で向かうか、などと任務に思考が傾きつつある契。そんな契を頼もしく思う反面、もう少し落ち着いてほしいとも思っているのが弘原海という男にして上司である。

「待て待て、もうちよい聞けって・・・その大学には築与の妹さんが通ってるらしくてな」

「真弓が？」

「なんだ、知り合いか？」

「ええ、一応」

「なら話が早いな。案内してもらえ」



僅かに逡巡する契。真矢の妹である真弓は確かに知り合いではあるが、素直に協力してくれるかどうか怪しい女性である事も知っている。

「どうした?」

「いえ、可能な限り頼んではみます」

ではこれで、と退室していく契を見送り、改めて件の大学に関する調査報告に目を落とす弘原海。真弓の事を聞いた契の迷いは気になるが、とにもかくにも現地に行かなければ始まらない。ここは契に一任すると決めたようだ。

「そういやこの大学の名前・・・どっかで見た覚えが・・・」



「へっくしっ」

「どうした嵐真、風邪か?」

「いや・・・体調はすこぶる良いんだけど」

舗装された道を歩く二人の男性。くしゃみをしたのは暁嵐真。またの名をウルトラアキレス、という事は一部の人間を除いて知らないごく普通で異常な大学生である。その横を歩くのは嵐真の友人「空依水人」。何かと休みがちな嵐真に講義の内容を伝えたり課題を手伝ったりと面倒見の良い男だ。

「相変わらずBURKの補欠は大変そうだな」

「特別隊員な?」

「似たようなモンだろ?」

違うって、いやいや補欠だろ、と他愛ない会話をしながら歩く野郎二人組。そんな二人にぶつからないよう小走りしていく会社員、二人とは違う方向に逸れる制服を着た女子、コンビニから出てくるジャージの男。こんな何の変哲も無い【日常】こそが嵐真の守りたいモノ、守りたい景色。皆が当たり前のように笑い、自らの人生を謳歌できる【普通】。これを守る為に俺はアキレスになったんだ、と改めて気を引き締める嵐真。

「おーい、どうしたー？急にイケメン顔作っちゃってさあ」

「えっ？いや、何でも・・・」

「なーんか最近変だよな。覚悟ガンギマリさせたと思っただらいきなり悩んだり。情緒不安定か？そういうお年頃なんか？」

「そこまで言うか・・・まあ悩みというか、何というか」

嵐真の悩み、直近で言えば「謎のウルトラマン」の事になる。人質を取った怪獣に苦戦していた時、突如として現れて共闘したかと思えば急に姿を消した「アキレスではなく」「過去に確認されたウルトラ戦士でもない」という存在。

(説明しろって言ったじゃねえか・・・基地でも会えねえし)

共に戦った嵐真にはその正体が分かっていた。嵐真に白い怪獣が瞳に人質を捕えている、という事を伝えたBURK隊員だ。本人が妙に印象に残ったのか、はたまたウルトラマンと一体化した者同士だから分かったのか。

「今度はどうした？あつ、アレか。恋の悩みか！遂にお前にも春が来たんだなあ」

しみじみと腕を組む水人。入学した時からの付き合いの為、互いの趣味やどんな性格をしているか等は把握している間柄だ。元気付ける意味も込めて茶化す水人と、それを理解してノる嵐真という光景は、既にこの大学の新たな日常風景になっていた。

「ちっげえよ。まあ話を聞きたいっていうか、聞かなきゃならないってのはあるけど」

「へー、それってどんな人なん？女の人の？」

「残念ながら男だよ。身長高くて目付き鋭い人」

もしかして美人？という絶賛彼女募集中である水人の淡い期待を両断する嵐真。続けて大まかな特徴を挙げる嵐真の言葉に更に肩を落とす水人。

「なあ、それって一般人じゃなくないか？ヤの付く自由業だったりしねえ？」

「一般人、ではないな。確かに」

「おいおい大丈夫かよ・・・あー、あんな感じの？」

「あんなって・・・はっ?」

既に視界に映っている大学。その正面ゲートで守衛と話をしている男を水人は指していた。長身で鋭い目付き、記憶の中のBURK制服とは違う私服を纏った男。話が終わったのか、敷地内へ向かおうとしているその背中に慌てて声を掛ける。

「お、おいアンタ!」

「・・・?」

他の学生の注目も集めてしまったが仕方ない。何かあったのか、と男も足を止めて振り返ったので御の字だ。

「暁 嵐真?」

正直BURK制服よりも厳つい印象になる青いレザージャケットの男、基地でも中々会えない隊員、嵐真が話を聞きたかった鶴千 契が居たのだった。



「悪いな、貴重な昼を」

「こつちも聞きたい事あるからな」

予定していた講義を終え、少し遅めの昼食と契との会話も兼ねて学食へとやってきた嵐真。昼時はやや過ぎている為か他の学生の姿は多くない。

「アンタがああの十字模様のウルトラマン、で合ってるんだよな?」

「メデイスの事か?そうだが」

「あつさり認めるんだな・・・」

「隠しているつもりは無いがな。もし俺とメデイスの事を知って利用しようとするなら、相応の報いは覚悟してもらおうが」

「アンタ本当にBURKの隊員かよ・・・」

午後の講義に出席するため水人はこの場に居ない。だが水人が表した「ヤの付く自由業」もそう遠くない表現じゃないか、と実感する嵐真だった。

「怪我してる所ぶん殴られたとか、言いたい事はあるけど・・・助かつ

たよ」

「お前のお陰でムムを救う事ができた。札を言うのは此方の方だ」

ちよつと誤解されやすいけど根は優しい人、でほぼ確定する契の印象。そんな契が何の為にこの大学まで来たのかが気になる嵐真だが、詮索して良いのか悩む所。だが契も契で学内に詳しい人物と打ち解けられたのは渡りに船だったりする。

「BURKの協力者でウルトラマンなら頼めるか・・・嵐真、聞きたい事がある」

「お、おう」

一つ違いという歳の近さと、生来の性格もあって距離の詰め方がエグイ契。期待値の低い真矢の妹よりも嵐真から情報を得るようだ。

「俺がここに来たのは、この大学から妙なエネルギーが観測されたからだ」

「妙なエネルギー？ああ、何日か前に危険物が発見されたとかいうやつ」

「雑な誤魔化しを・・・午前の時間を使って粗方歩いてみたが、特に異変やその兆候は確認できなかった。手持ちの計測機器にも反応無しだ」

「上手いこと隠してるのか、もう敷地内には居ないのかつてどこか」

嵐真を待つ間、見学者を装い調査を行っていた契。その結果は見事に空振りだった。

「お前が気付いた事は無いか？」

「うーん、そうだなあ・・・さすがに敷地全部を使ってる訳でもないからなあ」

怪獣の覚醒や異星人の侵略が活発化している今、アキレスとしての活動が忙しくなっている嵐真は出席そのものが危うい所。最近の学内事情にはあまり詳しくないらしい。

「そうか。なら過去のデータから、今回出現した可能性のある怪獣をピックアップする。直感でも良い、思う所があったら言ってくれ」

「おう！俺に分かる事ならドンと来いだい！」

そう言つてタブレット端末を操作しだす契。嵐真も契の言葉を待

っ。

「まず、この大学内で関係性を進めようとして破綻した学生は居るか？」

「俺に分かる事ならつつたよな!? 要はフラれたり別れたカップル居るかって事だろ!? 何の関係があるんだよそれ!」

「ホー」

「はあ?」

別名 硫酸怪獣。失恋による悲しみと、振られた事への怒りが引き金となつて発生したマイナスエネルギーにより生み出された怪獣。悲しげな鳴き声を発し、目からは別名通り硫酸の涙を流して物体を溶かす。更にはマイナスエネルギーの波動と毒ガスで周囲を破壊し尽くす危険な存在である。

「データによれば発生元は中学生だったそうだ。心身共に未発達の中学生から生まれた個体が、当時のUGMやウルトラマンを相手取れるだけの力を持っていたなら」

「大学生から生まれるやつは、もつと厄介つてか」

「ああ。言い方は悪いが、大人に近い分マイナスエネルギーも淀むだろうからな」

感情が発達する分、手酷い振られ方もする。語彙が増える分、より相手を傷付ける。そしてその分のマイナスエネルギーから生まれるホーも凶暴で手強くなるのだろう。

「聞きたい事は分かったけど、それは分からねえよ。情報通つてわけじゃないからな」

「そうか、なら次だ。この大学に昆虫を扱う学科はあるか?」

「昆虫? 生物学みたいな学科はあるけど・・・昆虫専門は無いと思うぞ?」

「なら昆虫を偏愛している学生——」

「またトンデモな目の付け所だなあ!? そこまで行くと俺も逆に知りてえよー!」

「ならグワガンダの線も薄いか・・・」

昆虫怪獣グワガンダ。小学生同士のいざこざから始まり、死んでし

まったクワガタムシに飼い主の怒りのマイナスエネルギーが乗り移って怪獣化したもの。

「当時のウルトラマン、エイティですら仕留めきれなかったというタフな奴だ。土の中に潜伏していたという情報もあるから、コイツかと思っただが」

厳密には飼い主の怒りが治まらない限り立ち上がり続けるという性質ゆえに倒せなかったのだが、今となっては伝説になっているウルトラマン80が仕留められなかったという事実を聞き、嵐真も戦慄している。

他にも難病を抱えている学生か、成功率の低い試験か何かを控えていて、模型作りが得意な学生は居ないか？という質問や、地熱やマグマに関わる論文が酷評された学生は？という質問を嵐真にぶつけては、さすがに知らねえよ！と返される契。当然と言えば当然なのが。

「・・・ならこれで最後だ」

「昔の怪獣つてとんでもねえ原因で生まれるんだな・・・」

悉く予想が外れた契は若干落ち込み、ほぼ全てにツツコミを入れ続けた嵐真は少し疲れている。そんな中で契が発する最後の質問。どんなトンチキが来るんだ、と身構える嵐真に対して契はどこか神妙な顔つきになっていた。

「正直これが上層部の考える最も確率の高い予測であり、個人的に一番外れていてほしい予測だ」

「・・・おう」

「この大学内で、人為的に大怪我を負わされた学生は居るか」

「人為的、って・・・」

学校で人為的な怪我。脳裏を過るのは【イジメ】や【体罰】だろう。それがこの大学で行われているか？という契の質問に対し、嵐真も憤りを隠せなくなる。

「アンタ・・・言って良い事と悪い事があるぞ」

「あくまで可能性の話だ。それに、個人的に一番外れていてほしい、とも言ったはずだ」

「っ、悪い」

「こちらも言い方というものを考えなかった。すまない」

マイナスエネルギーを生む人間の心。それを最も手っ取り早く最悪の形で砕くのは【暴力】と【理不尽】だ。契がタブレットに表示しているのは、かつてUGMとウルトラマン80が遭遇した【悪意】が形を成した存在。

「だが探らなくてはならない。最悪の場合、ウルトラマン同士の戦闘になる」

「っ！何で！」

「ウルトラセブン」

「セブン!?何でセブンが敵になるんだよ！」

妄想ウルトラセブン。何をしてもない少年が暴走族に襲われ、大怪我を負うという痛ましい事件が発生。その少年の怒りと憎しみがウルトラセブンの人形に宿り偽りのセブンが誕生。人々を守るはずのウルトラマンが街を破壊しながら暴走族に復讐しようとした、という悲劇を引き起こしたのが妄想ウルトラセブンなのだ。

「そんな・・・事が・・・」

「幸いUGMの女性隊員とウルトラマンエイティの奮闘でどうにかなったらしいが。当時よりも多いウルトラマンの存在が、世間一般に深く刻まれている現代だ。もし大学生の抑圧されていたマイナスエネルギーが解き放たれ、それがウルトラマン由来の何かに宿ればセブンのところか他のウルトラマンまで妄想体で現れかねん」

もしそんな事になれば、アキレスとメデイスの二人だけではとても抑え切れない。セブンの時よりも悪化した最悪の可能性を考え、嵐真も青ざめている。

「外れてくれるなら、それでいい。むしろ俺が慎重になりすぎているだけだと言うならそれでも構わない。だが最悪に至る可能性が僅かでも残っているなら、俺はそれを掴む。絶対にだ」

協力感謝する、と席を立つ契。成り行きとはいえ嵐真を不安にさせるだけだったと内心深く反省している。手掛かりが無い以上、足で稼ぐしかないと再び校内に向かおうとする契だったが――

「待ってくれ」

「ん？」

立ち上がる嵐真。その表情は決意に満ちた勇ましいものだった。

「最後まで手伝わせてくれ」

「最悪、同じ学舎の仲間を討つ事になるかもしれないぞ」

「その時は全力で止める。皆を守りたいから、俺は」

奇しくも契のベーターSフラツシャーと同じように懐に忍ばせているアキレスアイ。それを服の上から握りしめ、守るために、奪わせないために戦うと三度決意を新たにしようだ。その様を目にした契も、なら止めはしないと歩き出す。

「待てよ！一応、俺の方が先輩なんだからな！」

「歳と戦闘員歴は俺の方が上だ。それと、お前授業は良いのか？」

「・・・何とかなる！はず！多分！」

「はあ・・・ならなかったら弘原海隊長に言え」

「ぶえつくしっ」

「隊長、風邪ですか？」

何処かで誰かがくしゃみをしたらしい。



「で、こういう時どうすんだ？聞き込みとか？」

「そうだな。幸い授業終わりの生徒もそれなりに居るようだし」

昼過ぎの時間帯という事もあり、夕方より前に講義が終わった生徒の姿がちらほら見受けられる。もし悪意ある下手人が居るのなら、嗅ぎ回るのは悪手なのだが背に腹は代えられない。片っ端から聞き込みを始める二人。

「変わった事？さあ・・・特には」

「先生が体調不良とかで講義変わったけど、そういう事じゃなくて？」  
「悪い、急いでるんだ」



「変わったことお〜？目の前にい〜イケメンが二人も現れたことかなあ〜。この後つてえ〜ヒマあ〜？」

数分後、疲れきった二人の姿があった。

「大変なのな・・・聞き込みつて・・・」

「当然だ・・・次はあいつらだな」

どうにか気を持ち直し、校舎から出てきた三人組に聞き込みを行う契。最後まで手伝うと言った手前、嵐真も半ば意地でそれに付き合う。

「変わった事つて言われてもなあ」

「あつ、アレじゃね？運動部の連中が騒いでた」

「あー、怪談みたいなの？」

「怪談？」

マイナスエネルギーとの関連性が僅かに見出させた。もし恐怖を煽るような、おどろおどろしい何かを見てしまったのなら、或いは生み出してしまったのなら。

「その話、詳しく聞かせてもらえるか？」

「当事者じゃねえから詳しくは分かんねえぞ？」

「何か、夜の校舎で不気味な影を見たーとか」

「連れてかれそうになった、つて人も居るらしいよ」

顔を見合わせる契と嵐真。もし、マイナスエネルギー産の怪獣が生徒を餌にしようとしていたなら、または敵性宇宙人が生徒を連れ去ろうとしたなら穏やかじゃない。

「何処の部だ」

「何処つて、全部？」

「そうそう、大会とかある運動系サークルの連中はだいたい言つてたよな。最初に言い出したのつて剣道部だっけ？」

「でも被害無いから誰も相談とかしてないよ？よくある学校の怪談みたいな感じで、先生達も本気で調べようとしてないし」

今は何らかの理由で実害が無いとしても、いつ被害者が出てしまうか分からない。そしてエネルギーが観測されたのは三日前。ある程

度の蓄えが終わり、動き出してもおかしくはない。

「ありがとな」

「夜、だな」

夜の校舎。そこで網を張るしか無さそうだ。



「けっこう雰囲気あるなあ・・・」

「怖気付いたか？」

「なわけねえだろ！お化けみたいな奴とも戦った事あるし！」

生徒の姿が疎らになり始めた夜の校舎。今、この大学敷地内に残っているのは教師、ギリギリまで自習したい者と設備を使いたい者、サークル活動をしている者、そして契と嵐真だろう。人の目が多く見えて、意外と死角や目の届かない所も多い絶妙な時間帯だ。

「しかし、運動系の生徒を狙うのは何でだろうな？誘拐目的なら文化系サークルの方が狙われそうな気がするんだが」

「確かに拐う難易度という意味ではそうだろうな。あとは労働用の奴隷として、という可能性はある。若く、それでいて成熟した労働力というのはどの星でも欲しいのだろう」

更に言えば思考様式の異なる生命体としてサンプルが欲しい、等だろう。現にBURKのデータベースの中には人攫い目的の異星人が記録されている。古い所で言えば科特隊が遭遇した三面怪人ダダだろうか。

(第四惑星のような例もあるが――)

地球を丸ごと植民地にしようとしたロボットにまで思考を飛ばしていた契だが、遠くに人影が見えた事で現実に引き戻された。建物から出るのではなく、この時間に建物へ入って行ったのが気になるようだ。

「嵐真、あの棟には何がある？」

「あ？えーっと・・・たしか考古学とか歴史学専攻がよく使ってるはずだけど」

「考古学？」

運動系ではないのか？と疑念を強める契。無論たった今建物に入っていた学生が、謎のエネルギーや怪談話に関わっている確証は無い。だが、ここらで状況を動かしておきたいのも事実。

「嵐真はここに居てくれ。確認したい事が出来た」

「ああ、分かった。気をつけろよ？」

BURKの隊員に言うかと歴史・考古学棟へ向かって駆ける契。この場を任され、いつでもアキレスに変身できるよう気を引き締める嵐真。

そんな彼の背中を見つめる「何か」が居る事に、契も嵐真本人も気付いていなかった。



「電灯は落とし始めているのか」

利用者が少なくなつたからか、閉館の規定時間が近いからか既に電灯が消えている場所が見られる。警戒を強めながら、ベーターSフラッシュャーに近い位置に仕込んでいるサブコンパクトタイプの拳銃に意識を割く。さすがにBURKガンは今回のような任務に持ち込むには大型かつ嵩張るらしい。

「すまない、ちよつと良いか？」

契の進行方向から歩いてくる学生四人組。見た所これから帰るように見えるが。

「君達で最後か？」

「ああー鍵閉め？いや、俺らの他にまだ居たぞ」

「あれ何のサークルだっけ？」

「歴史学の・・・何か」

「民俗学だよたしか」

「助かる」

誰かが残っているという情報を聞き、学生グループが歩いてきた方向へ向かう契。曲がり角の先で確かに電気を点けている部屋を発見

し、そこへ足を進める――

「っ！」

突如として感じる違和感。自分が歩いてきた廊下を振り返るが、当然のように誰も居ない。学生グループはさっさと建物から出ており、新しく誰かが入ってきた様子も無い。

「何だ・・・？」

怪訝に思いながらも目的の教室に辿り着く契。中からは会話しているような声がする。聴こえる声からして女性だろうか。もし勘が外れても他の情報が得られれば御の字、という事で入室を決める契。引戸式のドアに手を掛け――

――カエレ

「そう言われて帰る訳にはいかないな」

一息にドアをスライドさせて入室する。教室の中に居たのは一人だけ。誰かに向けたような言葉が聞こえたのだが、と不思議がる契に驚いた様子の女性。恐る恐る契に尋ねてくる。

「あ、あの・・・どちら様、でしょうか」

「鶴千 契、BURKの隊員だ。見回りと聞きたい事があってな」

「聞きたい事・・・？それにBURKって・・・あ、えっと、すいません、何でしょう」

おどおどしているが受け答えはしてくれるようだ。

「三日前に危険物が発見された、という事は？」

「しっ、知ってます」

「それが異星人の仕業の可能性が出てきた」

「ええ!？」

「異星人でなくとも、超常的な存在や力が絡んでいるかもしれないのでな。こうして調査しているんだが」

「超常・・・」

微かな手応えを感じた契。異星人の部分は素直に驚いていたようだが、超常的な存在の部分に食い付いたのを見逃さなかった。自覚が無いのか、隠そうとしているのかはまだ不明だが、この女性に心当たりがあるのはほぼ確定と判断して良さそうだ。

(もう少し鎌を掛けるか)

「何か心当たりは無いか？それなりに悪質な奴かもしれないんだ」

「悪質って・・・そんな・・・」

「人を驚かせたり、連れ去ろうとしたり、今はまだ稚拙な手段しか取っていないようだが」

—————

「ダメっ」

「ん？」

「あ、いえ！何でも！」

「・・・とにかく、子供のイタズラが明確な悪意を伴った犯罪になる前に——」

—————

「堪えて・・・！」

「さつきから誰と話している？」

「あつ、ちがつ、そのっ！え、契さんですよ？」

鎌を掛け始めてから女性の様子がおかしい。契ではない別の誰かに言葉を投げ掛けているようであり、指摘すると分かりやすく動揺し、目も泳いでいる。契が入室する前にしていた会話もこの女性がしていたのだろう。

【何か】と。

「正直に話してくれないか？今、この場には何が居る？」

「わ、わたしと！契さんの二人しか居ません！」

「・・・そうか。まあ、驚かすしか能の無い、姿も見せられない臆病な奴なら大した被害は出ない——」

「ぬがあああああ!!!黙って聞いておれば調子に乗りおってえ！これ以上の侮辱は許さんぞ人間ンンツ!!!」

釣れました。

◆◆

「それで呼び出したは良いものの、全くといって力を発揮できないと」

「みたいです・・・」

「それもこれも！出鱈目だらけ間違いだらけの書物を残した阿呆と！それに輪を掛けて阿呆な儀をしでかしたお主のせいじゃろうがあ！！」呆れながら聴取を行う契、何故か床に正座している女性、キレ散らかす少女と三者三様のカオスが練り広げられている教室。

順を追うと、女性の名前は【月城 果乃】。嵐真と同じ19歳で専攻は考古学。軽度の人見知りとやや深刻なコミュニケーション能力不足でいわゆるボツチ。民俗学も派生して学んでおり、その中で黒魔術や悪魔との契約を知り、友達とはいかないまでも気軽に話せる知人が欲しいという何ともな理由で悪魔召喚の儀式を敢行。その結果呼び出されたのがキレ散らかす少女という訳らしい。

「あうう・・・おえんあはいい・・・」

「儂が全力を出せれば、貴様らなぞ軽く捻り潰せるのだからな！付け上がるでないぞ矮小な人間風情が！」

召喚主であるはずの果乃に対して、頬を引つ張り捏ねくり回すという微笑ましい灸の据え方をしている悪魔は【大魔獣 ビシユメル】。古くから語り継がれてきた強大な悪魔であり、果乃の求めに応じて現世に召喚された・・・のだが、果乃が参照した手引き書のような書物がビシユメル曰く「阿呆が書いた」レベルらしく、合っている事の方が少ないとの事。お陰で本来の力を一割程度しか発揮できず、今のところ仰々しい衣裳で胡散臭い喋り方をする少女でしかないようだ。

「そのうえ何だお主は！悪心とは無縁か！このままでは餓死してしまうわ！たわけ！」

「ほんはほほひっへほお・・・」

「そんな善人の雑な儀式に応じたお前もお前だと思うが」

口振りからするに人間の悪感情を食って生きているのだろう。だが果乃が少々臆病なだけで、他人への悪心を抱かない良心的な人物の為に食糧が確保できず、力も取り戻せないらしい。話を聞く限りでは果乃も果乃だが、召喚に応じておいて半ば逆ギレしているビシユメルもビシユメルである。

「はあ・・・それで他の人間にちよつかいを掛け始めたという事か」

「んんん？　そういえば、お主も先程から戯れ言をぬかすのう」  
「何だと？」

「儂が人間を連れ去ろうとした、だのと」

「あつ、そ、そうですよ！　シユメちゃんはその様な事しません！」

「その妙な呼び方は止めると言っておろうがあ！」

一度離れた手を再び果乃の頬に戻して引つ張るビシユメル。コミカルなやり取りに流されそうになるが、他の生徒が言っていた「連れ去られそうになった」はビシユメルの犯行ではないらしい。

「真剣に聞かせてくれ。扉に手を掛けた時、直接頭の中に響く声を出したのは」

「それは儂じゃな。心に揺さぶりを掛けて引き返させる術じゃ！」

「何故そんな事を？」

「此処は儂が呼び出されたいわば聖域！　何処の馬の骨ともしれぬ輩に踏み荒らされたくないのではなあ・・・待て、お主は何故入れた？」

「さてな」

「お主・・・まさか——」

ビシユメルが契の中に居る何かを感じ取った瞬間、寒気が走る。契とビシユメルだけでなく、一般人である果乃も感じたらしい。

「別件か・・・いや、こつちが黒幕か」

「儂も耄碌したものだよ。ここまで気付かなんだとは」

「・・・っ」

教室の外、廊下に【何か】が居る。

暗く深い【それ】が教室の扉に手を掛け——

## 呼ぶ者、呼ばれる者【後編】

「別件か・・・いや、こっちが黒幕か」

「儂も耄碌したものだ。ここまで気付かなんだとは」

「・・・っ」

一般人である果乃ですら感じ取れる重圧がゆっくりと、しかし確実に三人の居る教室に迫っていた。そして【それ】が扉に手を掛けた。果乃を後ろに庇い、懐のベーターSフラッシュャー——ではなく拳銃のグリップを握る契。ビシユメルはどうにでもなるだろう。

扉が開かれる瞬間、冷や汗が噴き出そうな重圧が一瞬にして霧散した。その代わりに現れたのは——

「何をしているんですか？」

一人の女性だった。今にも暗闇に溶けてしまいそうな黒髪を腰まで伸ばし、目元も前髪で隠れている。相対的に目立つ白衣を着ていなければ、それこそ幽霊か何かと間違えてしまいそうだ。現に果乃は不気味な雰囲気と抑揚の無い喋り方に恐怖したのか、聞こえるかどうかというポリウムで悲鳴を上げている。

そして契は、そんな女性に見覚えがあった。

「真弓？」

「・・・鶴千さんですか。何故こんな所に？」

築与 真弓、それが女性の名前である。

契の一応の知り合いにして、BURK日本支部基地に医務官として勤めている築与 真矢の妹だ。

「俺は調査で来ている」

「ああ、天下のBURK隊員ですものね。こんな大学に入り込むなんてお手の物ですか」

「協力してほしいんだが？」

「一市民として協力しますよ。聴取なり尋問なりお好きにどうぞ」

「真弓」

（なんじゃ、随分と仲が悪いようじゃのう？）

「み、みたいだね」



契に対して刺のある態度を取り続ける真弓。そんな二人の険悪な様子を果乃とビシユメルが眺めていた。ビシユメルはいつの間にか姿を消し、果乃にだけ聞こえる声で話しているが。

「はあ・・・歩きながらでも良いですか。この棟、そろそろ閉められるので」

「ああ」

「えっ、あつ、ごめんなさい・・・」

慌てて荷物をまとめる果乃。元からビシユメルと話すだけが目的だったのか、それほど時間もかからず教室を出る事ができた。

「あの扉を開けて何も無かったのか？」

「扉？ああ、帰って声ですか。私だけじゃなくてこの棟を使う人なら大抵無視しますよ。現にそちらの方も入れているようですよ」

「そ、そうなん・・・ですね・・・」

「あんなのを気にしてるようでは考古学なんて出来ないのよ」

(あんなのじゃとお!?今この場で我が真髓を見せてやろうか！)

姿を消しながら一応付いてきているビシユメル。直接姿を見たからか、目を付けられたからか声が契にも聞こえるようになった。先程までのごく短時間の付き合いながらも、この自称悪魔で大魔獣、ポンコツなんじゃないか?と思いは始める契。精神誘導とやらの呪いも、メデイスが居るから踏み越えれたのではなく、割と簡単に破れるモノだったりするのだろうか。

「まあいいです。それで?何を聞きたいんですか」

「ここ最近で起きた事。不審者や危険物、人非ざる存在が出現する兆候なんでもいい」

「そうですね、まず――」

「俺が現れた事以外で頼む」

「チツ・・・」

あなたが目の前に居る事ですかね、と皮肉から入ろうとした真弓だが、それなりに付き合いのある契に先回りされてしまった。隠す気がさらさら無い舌打ちを廊下に響かせ、本題に入る。

「最近、講義に顔を出さない方が居ますね。それも複数」

「何だと？」

(おい)

「病欠や怪我、家庭事情の可能性は？」

「少なくとも失踪前日に会った時は元気でしたよ。家庭の都合も無いんじゃないですかね、教師も把握してないみたいなので」

(おい人間)

「失踪と言い切れる根拠は」

「無断欠席だろうと？中には論文の提出を控えてた人も居るんですよ？そんな大事な時期に、誰にも行き先や目的を告げずに消えるって？」

(おい！無視するでない！)

「大学側は届け出たのか？」

「不審がってはいますけど、大学生なんてそんなモノだろうと本気にしてませんよ。論文を待つてる先生は焦ってますけど」

(人間！果乃が居らん！)

「っ！」

ビシユメルの切羽詰まった声で気付く契。並んで歩く契と真弓の後ろを付いてきているはずの果乃が居ない。何処かの教室に入ったのか？だが、閉めるはずの棟で、契にもビシユメルにも伝えず消える意味が分からない。急にイタズラを仕掛けるような性格とも思えない。

(誰にも伝えず・・・?)

たった今、真弓から聞いた話とほぼ同じ。周囲を警戒する契が別の何かに気付く。

「いつまで歩いて——」

「やっとな気付きましたか。訓練されたBURK隊員が聞いて呆れますね」

景色が変わらなすぎると。

ビシユメルの教室に辿り着くまでに最低でも一階層分は階段を上り、曲がり角も通った。にも関わらず真弓と歩きだしてから延々と廊下が続いている。出口の無い一本道とでも言うのか、終わりが見えない廊下は先の見えない暗闇へと続いている。

「どういう、事だ・・・」

(やはりおかしい!)

「ああ、そちらも姿を見せて大丈夫ですよ。隠れていても分かりますので」

(なにつ!?)

ついにはビシユメルにまで声を掛ける真弓。この異常な状況の黒幕は真弓でほぼ確定のようだ。

「真弓——」

「では鶴千さん。今度はこちらから質問しましょう」

「お前は何者だ？何故こんな事——つ!？」

(人間!)

弾かれるように吹き飛び、背後の壁に打ち付けられる契。痛みを堪えながら真弓を睨む。と、その真弓の背後に【何か】が見えた。鋭い鉤爪が生えた凶悪な腕が【窓の中に】消えていく。

「質問しているのは此方ですよ」

「くっ・・・」

「では改めて。最も人を縛り付けるのは何だと思えますか？」

「人を、縛るもの・・・？」

「BURKの隊員なら直ぐに思い付く、そしてあなたには思い付かないものですよ」

「恐怖です」

曇天の隙間から僅かに覗く月が真弓を照らす。不穏な空気を纏いつつある真弓に呼応するかの如く、空に浮かぶ月も不気味な光を発し始めたように見える。

「暴力や権力も確かに人を縛り付けます。ですが殴られて、脅されて、それで相手の言うことを聞いてしまうのは何故でしょう？簡単です。相手に恐怖したから」

物理的に傷付けられれば、その暴力を振るった相手に恐怖する。自分の立場を脅かされれば、その権力を行使した相手に恐怖する。簡単でしょう？と、まるで教師が生徒に指導するように、大人が子供を諭すように契へ語りかける真弓。

「人は恐怖に縛られながら生きてきた。それは現代も同じです。暴力は法に縛られ、権力はより先鋭化しましたが民衆には異なる形の恐怖が根付いた。失敗したらどうしよう、嫌われたらどうしよう、と」  
発達した社会でのチャレンジ、SNSを初めとする人間関係の破綻。それらへの不安もまた、人を縛る恐怖であると真弓は語る。

「そんな恐れ of 雁字搦めでは人類は衰退してしまう。何より異種から民衆を守るべきBURKが、兵士が恐怖など抱いていたら守れる物も守れない」

「何が・・・言いたい!」

「消してあげましょう、と言ったら?」

暗い髪の奥で不気味に笑う真弓。常人のそれではない狂気と共に、ビシユメルの教室で霧散したはずの重圧が再び契を襲う。

「そんな事が!」

「出来るんですよ。かの守り神様なら」

「守り神?」

「ふんっ!偉そうに喚いて結局最後は神頼みか!胡乱な神を崇拜するしかないとは、やはり人間は愚かじやのう!」

姿を見せたビシユメルが不遜な態度で真弓に食って掛かる。それを咎めるかのように、ビシユメルへ向けて凶悪な腕が伸びてきた。

「ぬおっ!」

「減らない口ですね、失敗作のくせに。それとも力で勝てないから舌戦で勝とうと?」

「ビシユメル!」

爪に切り裂かれ、衝撃で吹き飛ばされるビシユメル。裂けた黒いボロ布の下は柔肌ではなく、生々しい臓物でもない。真に実体化している訳ではないらしく、今の攻撃で【存在そのもの】がダメージを受け、損傷部位がそのまま消失したのだろうか。

「真弓!」

「私に銃を向けるんですか?BURKの隊員が、一市民に対して」

ハンドガンを抜き、真弓の胸に照準を合わせる契。拳銃に怯えるよ

うな仕草を見せた真弓だが、全く構えをブレさせない契を見て、心底つまらなそうに溜め息を吐く。どうやら怯える演技だったようだ。

「あなたなら最高の戦士になれるのに。生まれながらに恐怖とは無縁のあなたなら、ツクヨの兵士を束ねる長に相応しい。そう思っていたんですけどね」

「築与……？私兵部隊でも作る気か」

「違いますよ。もっと大きい、ツクヨの国の剣にして盾の……ああ、ツクヨについては知らないんですか」

遙か昔、日本に実在したとされる戦で無敗を誇った強大な国「ツクヨ」。戦争は連戦連勝、政治もこれといった問題の無い理想の国とされていたが、ある日を境に歴史から姿を消した謎の多い存在とされている。

「ツクヨの兵士は守り神様に恐怖を喰らってもらって戦に勝っていたんです。なのにその恩を忘れ、守り神様を暗く冷たい水底に封じ、自分達の存在すら葬った。恐怖こそ人を停滞させる禍なのに、それを捨てる事は人である事を捨てる事などと宣って！」

次第に熱を帯び、激しくなっていく真弓の口調。その勢いが衰えないまま言葉を紡いでいく。

「あまつさえ！私の家は関係を断とうとした！国の名前を授かった由緒正しき巫女の家系だというのに！」

築与とツクヨ。国と同じ名を賜り、守り神に祈りを捧げ、恐怖を捨てた兵士達を戦場に送り出す。守り神の声を聞く奇跡の指導者にして、狂気の扇動者。ここまで聞いた契は、おぼろ気ながら真弓の目的に辿り着く。

「復讐と再現……ツクヨの国を甦らせ、守り神の恩恵を忘れた者達を消そうと言うのか！」

「その通り、と言いたい所ですが少し違いますね」

熱狂から我に返り、今度は底冷えする声音で契の言葉を訂正する真弓。何が違おうと契も食って掛かる。

「消すのではなく役に立ってもらおうんですよ。恐怖を消し去り、最前線でツクヨの為に戦ってもらおう。最高の荣誉と贖罪を兼ねた素晴ら

しい案だと思いませんか？」

狂っている。真弓の瞳を正面から覗き込んだ契はそう断じた。いったい何が彼女をここまで狂わせたのか、何故このような思想に到ってしまったのか、それは契には分からない。今、分かっているのは絶対に真弓を、そしてその守り神とやらを止めなくてはならないという事。

「させると、思うか。そんな事を！」

「止めさせると思えますか？何の考えも無しに、あなたとの会話に興じると？」

既に仕込みは終わっているとでも言いたいのか、ついでにあなたを引き込めれば良かったんですけど、とも付け加えて真弓は背にしていた窓に寄り掛かる。そして優しげに、妖しげに、契へと微笑む。

「ねえ鶴千さん。今日は——」

——ウウウツ……！

「とても月が綺麗だと思いませんか？」

異形がその姿を月光のもとに晒した。



数日前に確認された謎のエネルギー。それが再び発生すると同時に大学敷地内に何の前触れ無く、突如として現れた怪獣。これをエネルギー発生の原因と仮定し、対処するためBURK日本支部基地から戦闘機が発進した。未だ現役運用されているBURKセイバーだ。

「クソツ、鶴千どころか嵐真も出ねえ」

『ホピスでもムム親子の保護でも生きていた鶴千です。そう簡単にやられる隊員ではないでしょう。それに彼も』

先頭を飛ぶセイバーに搭乗しているのは隊長の弘原海。手掛かりを掴み、夜まで張り込みを続けると連絡してきたのを最後に、部下の鶴千と交信出来なくなっている。それに加え、現地で偶然出会ったらしい暁 嵐真も同じく連絡が取れない。かたやウルトラアキレス、かたや外星探査にも選抜されたエリート隊員。駒門の言うように、そう

簡単に命を落とす二人とは思えない。

「だな。とにかく怪獣の侵攻は阻止しなけりやならん。油断すんじやねえぞお前ら！」

『了解！』

「まったく・・・前乗りで来たらスクランブルだなんて。さつさと片付けて帰りますよ」

『了解』

現れた怪獣への対応として出撃したBURKセイバーは六機。弘原海が隊長、駒門を副長とした日本支部部隊ともう一つ。部下と共に来日していた15歳の才媛、リーゼロッテ率いるドイツ支部部隊である。

「なんだありや・・・気味悪い奴だな」

「ふ、ふんっ。何です？日本の隊員はあんなのでビビっちゃうんですかあ？」

弘原海が気味悪いと表し、リーゼロッテ自身も若干ビビりながら茶化した怪獣の姿が、月明かりに照らされ明確に見えてきた。

鋭く吊り上がった大きな目。鋭い爪の生えた腕にガツシリとした足。凶悪な牙が生え揃う口が目を引き、闇夜に溶けてしまいうような暗い体色。そして何よりその【土偶】のような体の特徴と言える。

「んだとおービビってねえ！」

「どうだか——ひゃあっ!？」

どこまでも挑発的なリーゼロッテに弘原海が言い返し、子供じみた言い合いになりかけた瞬間。茶番はもういいかと怪獣が攻撃を行う。口から石のような物を大量に吐き出してきたのだ。

『隊長！』

「大丈夫だ！・・・野郎、問答無用かよ。全機、攻撃開始！」

「もうっ！日本のゴリラと猿に後れを取らないの！攻撃開始！」

機首部レーザー機銃での攻撃を開始したセイバー隊。どれだけがみ合っている、互いが干渉し合う危険なコースに入らず、矢継ぎ早に怪獣の注意を引き合うような動きを見せる。さすが叩き上げの隊長と天性の才を持つエリートといった所か。

「へっ、石を吐き出すしか出来ねえみたいだな！」

「ふんっ！ざあこざあこ！見てくれだけの石吐き怪獣！そんなんじや私達を墜とすなんて一生無理ですよお？」

このまま押し切れる、と二人が部下達と共に更なる攻勢に出ようとした時。【違和感】が彼ら彼女らに牙を剥いた。

「っ!？」

「へっ・・・あつ、ああ・・・!」

トリガーに掛けた指が動かない。それどころか機体を操作していた腕も足も、体を固められたかのように動かなくなってしまった。

『隊長!?隊長!コントロールを!早くッ!』

「っ!ぐっ、おおおおお!!」

駒門の声で正気を取り戻した弘原海。間一髪、怪獣への衝突コースから外れ、機体を急上昇させて離脱する。リーゼロッテの方もギリギリの所で機体制御に成功したらしい。

『大丈夫ですか!?!』

「あ、ああ。すまん、助かった」

(何だ・・・体が動かなくなつた・・・)

どうやら一筋縄ではいかないようだ。



「チツ・・・弾丸も通さないか!」

「空間、下手をすれば次元ごと隔離されておるのう。そのような玩具では破れまいて」

校舎の中に取り残された契とビシユメル。真弓は中庭に出ており、それを追い掛けようとして今に至る。廊下は進んでも戻っても景色が変わらず、窓や教室のドアは開かず契のハンドガンによる銃撃でも傷一つ付かない。

「だとしても諦める訳にはいかない!」

「頑張るのう。じゃが必死になった所で無理なものは無理じゃぞ」

「契約主が危険に晒されているのに随分と余裕だな」



果乃が姿を消した際、焦っていたように見えたが、今はそんな素振りは一切見せない。脱出手段を模索する契をあくび混じりに眺めている。

「死んだら死んだ、じゃしなあ。また別の人間を探せば良いだけじゃ」  
「・・・何だど？」

欠片も果乃を案じる様子の無いビシユメルの言動に契が手を止める。怒りを滲ませながら振り向いた契の視線も意に介さずビシユメルの言葉が続く。

「そもそも悪意の無い人間なぞ腹の足しにならぬわ。あやつから取れるのは、眠いだの授業を怠けようかだの、儂の欲する感情とは程遠い物じゃ」

「・・・」

「愚かな人間の中でも飛び抜けた外れを引いてしもうたなあ。まったく、本当に耄碌してしまったものじゃ」

「もう一度言ってみろ・・・！」

ビシユメルの胸倉を掴み上げる契。その表情は怒り一色に染まり、ハンドガンを握る手はほんの僅かに震えている。

「ほう？お主、存外感情的じゃのう？」

「ッ！」

「まあこれだけあれば足りるかの」

この期に及んでまだ、自らの腹を満たす事しか考えていないようなビシユメルに怒りをぶつける契。仮にも契約した果乃の事も蔑ろにした発言に対し、更に凄みを増す契だがビシユメルは余裕を崩さない。

と、次の瞬間、するりと契の手をすり抜けて廊下に着地するビシユメル。驚く契を素通りし、銃弾ですら傷付かなかった窓に手を翳す。

「ふっ！ぬうううああああ・・・！」

「おい！お前、何して——」

突如として奇行に走ったビシユメルを止めようとするが、目の前で発生した現象に動きを止める。ビシユメルが手を翳した場所が、ぐにやりと振れ始めたのだ。振れの中には光の膜のような物が見え、

そこから外の音が僅かに漏れてきている。

「これは……」

「っ、ふうっ！ハアツ！ハアツ！ゲホツ！おえっ……ぐぬう……これが、限界か……本当に……耄碌したわ……！おのれえ……！」

精も根も尽き果てたように崩れ落ちるビシユメル。疲労の仕方がやたらと人間くさいのは一旦置いて。どうやら真弓と守り神が作り出した閉鎖空間に歪みが生じたようだ。完全に開いた訳ではないが、外の状況が分かりやすくなっただけでも大きな進展だ。そして、今まではポンコツとしか思えなかったビシユメルが、急に別系統の呪いに対抗できた理由は――

「お前、わざと俺を煽ったな？」

「どうだかの……ゲホツ！ガハツ！」

契の怒りを煽り、それを吸収して力を行使したのだろう。守り神の力が想定より強力だったのか、ビシユメルが想定より弱体化していたのか、空間を破るまでは無理だったようだが。

「もう少しあれば……あー、アレじゃ。お主、女を抱いた事なぞ無かろう？どーてーじやろう！残念じゃったなあ、儂の力が戻れば誰もが振り向かずにはおられぬ傾国の美姫なのだがなあ！」

「急に雑になったな。そういう所が間抜けなんだ」

「もう一度言ってみろ人間ンンツ!!!」

意趣返しとばかりに先程のやり取りを返す契。ビシユメルには分からない所で微笑を浮かべていた。

歪みの前に立ち、懐に手を伸ばす。抜き放つのは点火装置。闇を切り裂き光をもたらす巨人の力。閉じ込められてから真っ先に思い付いた手段だが、今の今まで使える様子ではなかった。ビシユメルが歪みを抉じ開けた瞬間、脈動するように僅かな光が灯ったそれを構える契。

「お主、何をしておる――――まで、待て待て！それから危うい気配がするぞ!?早まるでないぞ!?!」

「遅いお目覚めだな。行くぞ」

「無視するでないわ！」

左腰に構えたベーターSフラッシュャーで斜め一文字を切り裂くように掲げる。溢れだした光が契を包み、閉じられた檻を壊しながら「ぐんぐん」と巨大な人の形を成していく。

「大馬鹿者がああああッ!!!」

若干一名、ならぬ一体の悪魔を巻き込みながら。



『常に視線を逸らせ！こいつは！』

戦闘を続けるセイバー隊。遠くの敵には大量の石を高速で吐き出し、近付く者はその鋭い爪で引き裂く。怪獣の武器はその二つだけのようにだが、弘原海は気付いていた。この怪獣の武器はもう一つあると。

『見詰められると体が強張る！相手をビビらせる力があるんだ！』

「恐怖を煽る、増幅するという事ですか！」

『面倒な真似してくれませぬえ！』

真弓の話聞いていない弘原海達は、この異形が「恐怖を喰らう守り神」だという事を知らない。だが、自身に起きた異変と積み上げてきた経験が弘原海を答えに導いた。それが共有されてからのセイバー隊は、注意を引いては別の機体が引き継ぐという攪乱戦法を徹底している。

だが、圧倒的なタフネスを見せる怪獣に対し、徐々にジリ貧に追い込まれつつもあった。何度レーザーやミサイルを撃ち込まれても倒れる気配を見せない姿に、増幅されてなるものか、と押し殺していた恐怖が這い出ようとしていた。

『しまっ、駒門！』

「っ！」

リーゼロッテの部下が乗るセイバーを爪で狙った怪獣。間一髪の所で回避に成功するも、怪獣は大振りの勢いが衰えず回転する。体勢を整えた怪獣の視線は、偶然か狙ったのか、駒門の搭乗するセイバー

を捉えていた。

その瞬間、駒門を襲う悪寒。【死の恐怖】が彼女の心に深く刻まれてしまう。前方には【口を開けている怪獣】が見え、それによって遠くない過去が呼び起こされる。

（食われて・・・死ぬ？これは、違う！シルバーブルーメはもう！）

「あつ・・・ああ、やめ・・・いや・・・！」

『駒門おおお!!』

駒門のセイバーを待ち構える怪獣。あわや激突かと思われたその瞬間――

『シユアツ！』

――グオオオオオツ!?

光が現れた。



「アレは?！」

中庭で驚愕に目を見開く真弓。邪魔者を遠ざけ、守り神の勝利を確信した矢先にこれだ、無理もない。

「何処から・・・！」

「ぐっ・・・ぬう・・・わ、儂を殺める気か痴れ者めえ！」

真弓から少し離れた場所、邪魔者一人と一体を隔離したはずの建物から、黒いボロ布が転がり出てきた。正に這う這うの体といった様子のビシユメルだ。

「出来損ない?なら、あのウルトラマンは」

隔離棟から出てきたビシユメル。そして同じ方向から飛び出してきた、ニユース等では見慣れないウルトラマン。そこから推察されるのは――

「あなただと言うのですか・・・?っ! 鶴千契! 何処までもあなたは! 私の邪魔をしてツー!」

憎悪を滾らせ、ウルトラマンの銀十字を睨む真弓。飛び蹴りをもちに受けて倒れ込んだ守り神に向かって声の限り叫ぶ。

「我らが守り神様！それは人々を惑わす偽りの救世主！真の先導者にして守護者たる貴方様の手で裁きを！」

彼方の星から飛来した巨人と、眠りから目覚めた旧き妖獣の戦い。その幕が切つて落とされた。



「銀十字のウルトラマン！」

「き、来てくれた、のか・・・」

「ホピスに居たウルトラマン!?地球に何の御用でいらつしやつたの!?!」

(駒門さんも無事か。あの騒がしいセイバー乗りはドイツの・・・)

——— グラアアアアッ!!!

唐突な飛び蹴りに怒り心頭といった守り神。現代においては、邪魔な異教の神とも言えるメデイスを排除しようとその牙を剥く。守り神に向き直つてファイティングポーズを取るメデイスだが、ここで契が違和感に気付く。

(アキレスが居ない?)

外で待つていたはずの嵐真が変身していない。怪獣が現れ、セイバーまで出撃した状況なら既に戦闘開始していそうなものだが。

(まさか、果乃と同じように・・・!)

変身しないのではなく出来ない状況。それなら納得もいく。現に契もビシユメルの力が無ければ閉じ込められていたままだったかもしれないのだ。

(なら尚更、迅速に仕留める!)

『フッ!』

——— グウオアアアア!!

互いが互いに向かつて駆け出す。先手を取ったのは守り神。メデイスの胸辺りを狙つて爪を振り抜くが、対するメデイスは体勢を低くしてそれを躲す。ダツシユの勢いを殺す事なくチャージを敢行し、守り神に組み付いた。

『ハッ！デヤアッ！』

後ろに押し戻される守り神だが、どうにかメデイスを振りほどく。だが契は攻め手を緩めずボディブローからストレートパンチを繰り出した。

——グルウ……！

堪らずよろける守り神。更に追い打ちのローキックで膝をつき、的確に腹を抉るケンカキックが突き刺さる。普通の生命体なら戦闘不能になってもおかしくない連続攻撃だ。

だが、この守り神は「普通の」存在ではない。蹴りで吹き飛ばされた先には大学校舎。そのままぶつかり、派手に建物を粉碎すると思われた守り神だが——

『へアッ!?!』

(消えた!?!何処に……!)

正に激突する瞬間、姿を消したのだ。まるで建物に吸い込まれるように。メデイスの感覚を持ってしても捉えられない守り神を警戒する契。

守り神が消えた棟のガラスと、空に昇った月が妖しく輝いた瞬間——

——ゴヴオア！

『ツ！グアアアッ!?!』

メデイスの背後に現れ、石を吐き出す守り神。さすがに防御が間に合わず、もろに石の連射を食らって倒れるメデイス。

(くっ、コイツ！)

起き上がるのと同時に光弾を放とうとする契だが、狙いを付けようとした時には守り神の姿は無かった。光弾として使うつもりだったエネルギーを散らし、先程よりも頻繁に背後を警戒しながら守り神を探す契。セイバー隊も守り神を見失い、大学の上を旋回している。

と、次の瞬間。

『ウツ!?!』

(なっ!?!)

メデイスの左足に違和感。視線を足元に向けた契が見たのは、守り

神の異形の手がメデイスの足を掴んでいる光景だった。本棟の入り口に設置されている噴水とその受け皿である水場。そこから守り神の手が伸び、メデイスを拘束していたのだった。

(クソッ！)

手を踏みつけ、光弾を再び放とうとするが、守り神の方が一手早かった。手に続いて這い出てきた頭部、その口から石弾が連射され、至近距離での直撃で甚大なダメージを受けてしまう。

(くっ・・・コイツ、水を・・・いや違う。最初はガラスで次は水・・・鏡面か！)

傷付きながらも思考は止めない契。やや背の高い棟から現れた一回目と、水の溜まっていて噴水から出てきた二回目。それから「鏡面から鏡面へと移動できる」という守り神の能力を見抜いた。

(推測が立った所でどうする！無闇に破壊する訳にもいかん。それに砕けたガラスからも現れかねん！)

メデイスの、ウルトラマンとしての力を振るえば付近一帯の鏡面物を破壊し尽くす事は可能だろう。だが、住人が眠っている民家を攻撃する訳にいかず、鏡面物そのものを消滅させなければ出てくる可能性がある。

(次に出てきた瞬間、全力で叩くしかない。結局強引なやり方しか出来ないらしいな、俺は)

結論は脳筋式。自分へ皮肉を送り、メデイスの力も借りて限界を超える集中を見せる。

.....！

(っ！)

『シユウアッ！』

不意を突こうとしたのか、最初に姿を消したビルから現れた守り神。吐き出された石弾と入れ違う形で、守り神へとメデイスの放ったエネルギー波が飛ぶ。

(つか・・・まえ、たあッ！)

———グギユルルルッ!?

守り神の石弾が肩を掠め、相討ちのような形で命中させたリング状

のエネルギー波。最初のウルトラマンが使用したキャッチ・リングのような拘束光輪を、素早いモーシヨンで撃ち出す我流技アタックキャッチャーだ。

——グオオオオオツ！

『デエアアツ！』

着弾までの速度を優先した技の為、拘束時間はそう長くない。現に守り神を縛る光の輪は今にも壊れそうになっている。だが、逃げる隙を与えなければそれで充分と契は一気に距離を詰めている。鋭いチョップを二度、三度と叩き込み、鏡面から引き離した所で切り札を一つ切る。

(少し借りるぞ！)

『ヌウツ！シユアアアツ!!!』

思い描くのはホピスでの戦い。自身と同じBURK隊員の土道剣と一体化していたウルトラマン、シユラの宇宙剣術。超高速の光刃斬撃六連「スペシウムブレード・ヘクス」、そのの一太刀に持ち得る技量の全てを注ぎ模倣する。名付けて「シフリウムエッジアイン」。

——ギヤアアアアア!!!

人間で言う所の、肩から脇腹までを袈裟斬りにされた守り神。手応えを感じる契だが——

——グギヤアアアアツ!!!

(何っ!?)

切り裂かれたお返しとばかりに、メデイスの胸部へ爪を突き立てる守り神。そのまま投げ飛ばすように腕を振り抜き、メデイスに裂傷を与えつつ距離を取る。

(チツ・・・！)

飛ばされた先で体勢を整えたメデイス。一体化したメデイスの身体の一部を忌々しげに睨み、直ぐさま守り神へと視線を戻す。度重なるダメージと能力・技の使用により、カラータイマーが赤く点滅しているのだ。

『隊長！ウルトラマンが！』

『ちよっ、ちよっと!?アレが点滅したらピンチの合図じゃありません



でした!?!』

『あのハニワ野郎、タフすぎるだろうが!』

メデイスの危機と守り神の圧倒的なタフネスに動揺するセイバー隊。そんな中でも守り神をメデイスに接近させまいと、フォーメーションを組んで攻撃に移ったのはB U R K隊員の面目躍如か。

——グヴツ……

『ハツ?!』

(何だ?)

恐らく石弾を吐き出そうとしたのだろう守り神が、突如として動きを止める。セイバーのレーザー機銃やミサイルに怯んだ訳でもなく、メデイスが新たに技を繰り出した訳でもない。

「ぬうつ、おおおあつ!!!」

「こつのお・・・出来損ない風情があ!」

その原因は、少し離れてしまった大学敷地内にあった。



メデイスと守り神が激闘を繰り広げている時、大学の中庭でもう一つの戦いが始まっていた。

「隙ありいいいいつ!!!」

「なつ!?!」

陶醉する守り神に視線を向けた矢先、脅威にならないと判断したビシユメルが飛び掛かってきた。真弓に組み付くやいなや、その華奢な肢体をまさぐるビシユメル。幼い子供に襲われる女子大生という、特定の人間の何かしらを刺激しかねない絵面になっているが、ビシユメルが真弓に対して急に欲情した訳ではない。

「人間には、食い物の恨みは恐ろしいという格言があるそうじゃのう!」

「どこを、さわっ・・・んんっ!」

「儂に力が流れてこんかったのは! 貴様が独占しておったからじゃろう! 寄越せ!」

「誰が・・・渡す、とっ！」

「ええい！何処じゃ！何処に隠しおった！」

いちやついているか、いかがわしい何かにしが見えないが本人達は至って真面目にやっている。これでも。

「ぬ？これは・・・ふぐつ!？」

真弓の奥底、肉体的ではなく精神的な部分に〔何か〕があると気付いたビシユメル。深く探ろうと動きを止めた瞬間、脇腹に激痛が走る。

「はあ・・・はあ・・・手こずらせて・・・」

古めかしい装飾の施された短剣がビシユメルの体に突き刺さっていた。無論、真弓が刺したのだ。徐々に真弓からずり落ちていくビシユメル。そのまま力尽きて消えると思われたが――

「ぐつ、ぬうつ！」

「っ、まだー！」

ちようど真弓の下腹部辺りで息を吹き返し、再び真弓の服を掴む。

「みつ・・・け、たあつ！いり、ぐ、ちい！」

忌々しい出来損ないにトドメを刺そうと短剣を振り上げる真弓。その首筋に狙いを定めた瞬間、ドクンツ、と自分の心臓が跳ねたのを感じ取った。急速に辺りが冷えていくような錯覚に襲われ、ガタガタと震えも止まらなくなる。

そして理解する。自分が門として使われていると。

ああ・・・これは駄目だ、と。

「ぬうつ！おおおあつ!!」

「こつのお・・・出来損ない風情が！」



――グウウウウ・・・オオオオオ・・・！！

(弱っている?)

先程よりも明らかにプレッシャーが弱くなった。苦しむように呻き声を上げ、胸を掻きむしりながら月に手を伸ばし始めたのだ。

(月……?雲に隠れたのか?)

ほんの少し前から、妖しげに輝いていた月は雲に隠れてしまっている。守り神はそんな事お構い無しに暴れ回っていたはずだが。

(何はともあれ、この好機は逃さん!)

『ハアアアア……デユアツ!』

今度こそ仕留める、とエネルギーを右手に集中させ、回転するシフリウムエツジを作り出す。ウルトラ戦士の十八番である光線技の応用、八つ裂き光輪とも呼ばれるエネルギーカッター。ウルトラスラッシュだ。メデイスの腕から放たれたそれは、契の狙いから寸分違わず守り神を切り裂いた。

——ギャアアアアア!!!

悲鳴のような声を上げ、仰け反る守り神。倒れはしなかったものの、フラフラと弱々しい足取りで逃走を開始した辺り効いているようだ。逃げる先には一際大きなガラス張りのビル。また鏡面世界に逃げ込もうとしているらしい。

(逃がさん!)

『ハッ!シユアアアアツ!!!』

セイバー隊の攻撃すら無視して逃げる守り神の背に狙いを定め、右拳を突き出すメデイス。それを腕ごと回し、再び前方に持ってきて左手と合流させスパークを起こす。放たれるのは光の奔流。治癒の力と対をなす破壊の光、シフリウム光線だ。

——アアアアア……!!

逃げる姿勢そのままに倒れ込む守り神。一拍置いて大爆発し、勝者がどちらか示すのだった。



数日後、再び大学にやってきた契。事務的な処理はほぼ済み、守り神とメデイスが踏み荒らしてしまった中庭や道路の補修も始まっている。事後処理と称してわざわざ再来訪した理由は——

「よお!契!」

「お前じゃないんだがな」

講義終わりなのか、何処か元気な嵐真が出てくる。挨拶に対して割と辛辣な返しをする契だが、嵐真の後ろを歩いてきた女性を見て、安堵したように息を吐く。

「あつ……えつ、と……お久しぶり？です」

「数日だが……まあ、久しぶり」

月城 果乃、今回の事件に決して小さくない貢献をした女子大生。彼女がビシユメルを召喚していなければ、契も嵐真もかなり危険だっただろう。

「今回は不覚を取ったけどよ、次はバツチり俺が活躍してやるからな！」

「期待せずに待ってるよ」

「んだとお！」

「あのっ、け、喧嘩は……ダメ、ですつ、よっ！」

アキレスである事は隠しつつも、事件の関係者から友人になったらしい果乃と嵐真。そこに契も含めて新たな交友の輪が出来たらしい。

その輪の中には、最大の貢献をした悪魔の姿は無かった。

「本気じゃねえって」

「なら良いです……あつ、契さん」

「ん？」

「そ、その……真弓さん、は」

「あいつなら——」



「どうぞー、つと。いらっしやい」

「……」

BURK日本支部基地。その医務室にて。髪の長さだけが違う、瓜二つの女性二人が向き合っていた。

「契から聞いたわ」

「……」

「今日は他に仕事無いから、たつぷり話しましょう？・ね？真弓」

「・・・何を、私の処分についてですか」

「違うわ。私達の今までと、これからについて」

もう何年も顔を合わせていない、避けてすらいいた姉の顔。自分と同じ顔。見たくもなかった顔。それが真つ直ぐに自分を見ている。

やっと、見てくれた。

「っ！貴女の事がっ！嫌いだった！」

「うん」

「何でも上手くやって！私を置いて！」

「うん」

「契とつるんで！散々私を振り回して！自分と同じ顔をした人間が持て囃されて！私はどんどん惨めになっていった！」

「・・・うん」

「貴女とは違う道を選んで！その中で家の事を、ツクヨの事を知った！貴女に出来なかった巫女を私がやれば！新たなツクヨの伝説を打ち立てれば！私は貴女を超えられる！そう・・・そう、思つて、いた・・・のに」

怒りと憎悪はやがて悲哀に。溜め込んでいた感情を吐き出し、目からは大粒の涙が溢れ出す。

「何で・・・私の邪魔をするの・・・」

「ごめんね」

真弓を優しく抱きしめる真矢。

「私もね？真弓に負けたくなかったの」

「え？」

「真弓、昔から本が大好きでしょ？勉強も私より出来たし、テストの点で勝ってた事無かったのよ？だから私は運動で勝つてやろうつて、はしやいでたのよ。契も昔から体動かすの得意だったしね」

「そ、そんなこと・・・」

「それでね？自分も契も遊び回つて怪我する事多かったから、それを手当てしてまた遊ぶんだ！つてくだらない理由で医者目指すようになったのよ。あとは、勉強でも真弓に負けたくない！つてね」

「・・・」

「根っこは同じ、負けず嫌いなものよ。私達」

「言って、くれなきや・・・分かんない、よ・・・」

「そうだね。でも、それもお互い様でしょ？」

「うっ・・・ううっ・・・っぐ、ひっく・・・」

「ごめんね・・・真弓。気付いて、あげられなくて」



「仲直り、できるといいですね」

「出来るさ。姉妹なら、家族なら、言葉を交わせれば分かりあえる」

「だな！」

「おーい、嵐真ー！」

少しズレて講義が終わったらしい水人が校舎から出てくる。じゃあまたな！と手を軽く振り、二人と別れて水人に合流する嵐真。憑き物が落ちたように元気で騒々しい嵐に苦笑するしかない二人。

「とても暗黒空間に閉じ込められてたとは思えんな」

「ですなぁ。あつ、ごめんなさい契さん。わたしもこれで」

「ああ、気を付けろよ」

着信かメッセアプリアか、携帯端末を取り出して慌てる果乃。ビシユメルの事は残念だったが、と続けようとして言えなかった契だが、果乃の携帯の画面がひび割れている事に気付く。と、その瞬間――

（勝手に殺すでないわ、馬鹿者め）

「なっ」

「契さん」

しーっ、と可愛らしく人差し指を唇に当てる果乃。そのまま大通りに駆けて行き、雑踏に紛れて見えなくなってしまった。

「・・・まったく」

またしても苦笑するしかない契。あの程度の悪霊なら放置でも問題無いな、と大学敷地内に向かって歩き出した矢先、何も無い所で躓

いでしまう。

それは偶然か、はたまた悪魔の悪戯か。  
何にせよ、この事件はこうして幕を閉じた。

## 招く者、拒む者【前編】

「合同演習、ですか」

「ああ、大学の件、レッドキングの件から立て続けだが」

BURK日本支部基地、ブリーフィングルームにて。鶴千 契をはじめとした実働部隊員が集められていた。隊長である弘原海は別件で外している為、代わりに副長相当の駒門が進行を務めている。

「自衛隊に合わせてって感じですかー？」

「そうだ。それぞれ即応できるように、日程はずらすかな」

女性隊員の一人、太刀薙の質問に答える駒門。スクランブルを掛けられるとはいえ、活発化しつつある怪物や異星人の襲撃に対応するには自衛隊かBURKのどちらかがフリーな状態である事が望ましい。

「他に質問は？・・・鶴千」

「ドイツ支部が難癖でもつけてきましたか？」

「お前は・・・聞きにくい事と言いつらい事もお構い無しか・・・」

挙手したのは空気を読めないどころか木っ端微塵にする男、鶴千 契。自衛隊に合わせたついで、というだけで防衛チームを動かすのに違和感の残る契。大学での事件でリーゼロツテ率いるドイツ支部のセイバー隊が加勢に来た事と、どこか違和感の残る演習を繋げ、日本支部に思うところのあるドイツが公的な仕事にかこつけて乗り込んで来たのでは？と推測する。

「はあ・・・正解だ」

観念したように溜め息を吐く駒門。手元の端末を操作し、プロジェクターで映し出されている映像を切り替える。表示されたのはドラム缶のような寸胴体型に派手なカラーリングが特徴の人型に近いロボット。

「セブンガー？」

「そうだ」

「はいはい、セブンガーとドイツ支部にどういう関係があるんですかー？」

ざわつくブリーフィングルーム。日本支部の新たな切り札として



期待されているBURKセブンガーに対し、ドイツ支部が何を言ってきたのか。先ほどと同じく太刀薙が大多数を代表して質問する。「先に挙げたレッドキング戦でその性能を遺憾無く発揮したのは、この場に居る全員が知っていると思う。ドイツ支部が騒いでいるのは、その出自とタイミングだ」

「シャーロット博士が設計した兵器を日本支部で完成させて投入したのが気に食わない、と?」

「・・・」

契の発言に首肯する事で答える駒門。その表情は心底疲れきっている顔だった。そして、駒門と契のやり取りを聞いた他の隊員達も呆れていた。僅かに怒りを滲ませたりと、各々少なからず感情が発露している。

「・・・くだらん」

「そう言うな鶴千。此方としてもセブンガーの調整が出来る良い機会だ」

「もうひとつ良いですか? 出自の方は分かりましたけど、タイミングってというのは?」

「ドイツ、というより欧州でもセイバーに代わる新型の開発を進めていたらしくてな」

「いざ御披露目しようとした所にオーストラリアと日本の共同でセブンガーが完成し、メンツを潰されたと逆上ですか」

「・・・有り体に言えばそうなる」

「完全に逆恨みと八つ当たりじゃないですか!」

あまりにも子供じみた理由に、契をはじめとする半分は心の底から呆れて溜め息を吐き、太刀薙をはじめとするもう半分はそんな理由で公的に日本支部を叩こうとするドイツに怒り心頭といった様子だ。

そして上層部と現場に見事に挟まれた駒門は胃痛を感じ始めている。

「もう一つ確認を」

「何だ・・・?」

「大学での事件でドイツ支部のセイバー隊が動いていましたが、演習

の相手はその時の部隊ですか？」

「いや、リーゼロッツテ隊は新型を運用する部隊の支援と案内の為に前乗りしてきたただだ。恐らく・・・実質的な休暇だろうな」

「本当に何をしに来たんだあの女は・・・」

契は軽い頭痛を感じて目頭を指で押さえていた。



「っ、へくちっ」

『どうしたのリス。風邪？』

「きつとこのリーゼロッツテ様を誰かが褒め称えているのよ！」

『その前向き思考だけは見習いたいわね・・・』

BURK日本支部基地内、外部の隊員に貸し出されている部屋で可愛らしくしゃみをする少女が一人。ブリーフィングルームで何度も話題に出されているとは知る由も無いリーゼロッツテである。そして、姿は無いものの個室に響くもう一人分の声。リーゼロッツテが持つ端末から発せられているのは、彼女よりも少しだけ年上の女性の声だ。

「ふふん。思考だけじゃなくて、腕前も見習って良いのよ？ま、この天才パイロットであるリーゼロッツテ様の操縦を真似できるならの話だけれど！」

『ああ、うん。とりあえず元気なのは分かった。無駄に』

「無駄とは失礼ね!?!・・・んっ、それで？そっちの到着は予定通り？」

『ええ。隊長もリナも、機体にも問題は無いわ』

「それは良かったわ。ルートシルト隊長まで来るとは思わなかったけれど・・・」

『リス、本当に隊長が苦手よね』

仕方ないじゃない！と赤くなるリーゼロッツテ、まだまだ子供ね、と追加でリーゼロッツテをからかう通信相手の女性隊員。何を隠そう、リーゼロッツテをリスと愛称で呼ぶ通信相手こそ、契達が話していたBURKドイツ支部の演習相手なのだ。

「んっんっ！それで？勝てそうかしら、新型の方は」

『当然、勝つつもりだけど。珍しいわね？あなたが勝敗を確信しないなんて』

「私と同じ外星調査に選抜されたメンバーが出てくるだろうし、仮にも怪獣被害頻発国の隊員だし・・・あっ」

『・・・良いのよ、気にしないで』

失言に気付き、普段の傲岸不遜さは鳴りを潜めて気まずそうにするリーゼロッテ。相手も一瞬だけ表情を曇らせるが、直ぐに調子を取り戻す。ちよつとやさつとの事では壊れない、確かな絆で結ばれているようだ。

「当日を楽しみにしているわ！少し見ない間に腕を鈍らせていたら承知しないから！」

『ご期待に沿えるよう頑張りますよ、お嬢様？』

冗談を交えつつ、演習当日に向けて闘志を燃やす通信相手の女性。親友同士の通信は和やかに終了したのだった。



暗く、暗く。

深く、深く。

落ちる、落ちる。

伸びてきたそれが私を。

私を――



「っ！はっ！」

リクライニングシートから飛び出すかのような勢いで身体が跳ねる。嫌な汗で全身が濡れ、体を預けていたシートにもいくらか染み込んでいる。リーゼロッテとの通信を終え、少し経ったくらいで寝落ちしてしまったようだ。

「また・・・いや、いつもより酷い・・・」

いつからか見るようになっていた悪夢。形容しがたい何かに捕まり、暗く底の見えない深淵に連れていかれる悪夢。評判の良い医者にかかっても、少しアングラな所で診察してもらっても、何をしても改善の兆候すら見せない厄介な悪夢。

掛けていた毛布を鬱陶しげに剥がし、僅かにブラインドを開いて外を眺める。夜の帳が下りた空では、月の光だけが光源となっている。そして、雲の下には全てを呑み込んでしまいそうな海が広がっている事だろう。

「だから、海は嫌いなよ・・・」

輸送機の個室で、今は見えない海を忌々しげに睨みながら呟く女性の名は「ミア・ヴォルフ」。BURKドイツ支部所属のパイロットである。



「何で俺なんだよ・・・」

「現状、セブンガーの性能を完璧に活かせるのがお前だから、としか言いようが無いな」

日本支部基地の格納庫で話し込む二人の男。片方は契、もう片方は分かりやすく「変人」であると伝わる着ぐるみを着ている。

「お前が乗れば良いだろ？」

「残念ながら、俺はGホークで出る。それに、人型より戦闘機の方が性に合ってるんでな」

「はあ・・・ったく・・・」

古代怪獣ゴモラを模した着ぐるみを着込み、盛大なため息を吐いたのは「荒島 真己」。BURK日本支部の男性隊員にして、契と同じく外星調査にも選抜されたエリートの一入である。

ちなみに年齢は25歳と契より五つも上なのだが、契はその辺りを全く気にせずいつもの調子で話す。下に見ている訳ではなく、同じ戦場を駆け抜けた同僚に敬語というのみな、と良くも悪くも存在する仲

間意識から来ているのだ。それに加えて五歳差など誤差、という戦闘関連以外は割と雑な契の感性も原因だったりするが。

「それにリーゼロッテも来ているしな」

「・・・それが？」

「カッコつけるチャンスだろう」

「そういう関係じゃねえし！」

「何にせよセブンガーは任せる。可能な限り援護してやるから一分で片付けろ、出来るだろう？お前なら」

「歳上使いが荒いんだよ・・・」

リーゼロッテと荒島のどことなく微妙な関係は契も知るところである。発破を掛ければ乗ってくるし、口では何だかんだ言いながらセブンガーに愛着があるのも知っている。そしてそういう男だからこそ、背中を預け合うのも悪くないと思えるのだ。絶対に本人には言わないが。



「隊長が居ない？」

「ああ、通信にも出ないんだ。その様子だと鶴千も知らないか・・・」

格納庫での語らいから三日後。前日に自衛隊と各国の軍隊との合同演習が終了し、残すはBURK日本支部と各国支部の演習となった当日。広大な演習場として確保された山間部でドイツ支部の到着を待っている契達だったが、隊長である弘原海が見当たらないらしい。

「何処に行ったんだ・・・？」

「演習に難色を示してはいたが、さすがにサボる程ではないでしょう」

「とはいえ予定時刻は迫っている・・・やむを得ん。太刀薙」

「はい？」

「代わりにType-Bに乗れ」

ギリギリまで待つてはみるが、弘原海の代わりに太刀薙隊員をコ・パイロットとして乗せる方針に切り替えるようだ。これで日本支部の編成は、Gホーク Type-Aに契、Gホーク Type-B

に駒門と太刀薙、セブンガーに荒島となる。後はドイツ支部隊の到着を待つのみとなった。

その瞬間――

「警報だど？」

「こんな時にか・・・！状況は？」

『神戸港沖合に水棲と思われる怪獣出現。現地で迎撃が開始されたが、怪獣の侵攻を止めるには至っていません。BURKにも出動要請が出ました』

「了解、聞いた通りだ！演習は中止！神戸港へと向かう！鶴千、太刀薙両名は私と共にGホークで先行、荒島隊員はセブンガーのブースター装着が完了次第現地に向かえ！」

「了解」です！

『了解しました』

「出撃する！」



「・・・」

『どうしましたー？鶴千センパイ』

「過去にウルトラ警備隊が神戸港でロボットを迎え撃つたらしくてな、今回はこちらがロボットを出すという状況になったのか、と思っただけだ」

『あー、ドキュメントUGです？私も見ましたよ。確かキングジョーでしたっけ』

「キングジョー、か・・・」

かつてウルトラセブンを追い詰め、ウルトラ警備隊との連携すら破りかけた宇宙ロボット キングジョー。契と太刀薙の言う通り、BURKが向かっている神戸港でセブンと激闘を繰り広げ、当時の科学者が完成させた新型爆弾で大破したという記録が残っている。

だが、契が若干のセンチメンタルに浸っているのは神戸港を破壊しようとしたキングジョーではない。甦った記憶の中に色濃く残る、謎

の多いホピスのキンググジョーだ。あの星のキンググジョーが何を目的として起動したのか、何の為に駆け付けたウルトラマン達に向かってきたのか、契は憶測でしか語れない。正解を知る者は既に消え、キンググジョーも自分達が倒したのだから。

『お喋りはそこまでだ。見えてきたぞ……!』

『了解!……何あれ』

「アレもどこかで……」

駒門の言葉で現実に戻される契。Gホークが捉えた怪獣の姿に契は既視感を抱いていた。

「蛸、か?」

『えーつと……あつ、これ!ドキュメントUGM!』

「つ、ダロンか!」

タコ怪獣ダロン。「とある理由」で普通の蛸が怪獣となり巨大化したもの。かつてウルトラマン80と戦闘を行っており、UGMのデータにその存在が残されている。複数の触手で敵を締め上げ、高圧電流を流す能力を身に付けている。他にもエイティの光線を受けても怯まないなど面倒な性質を持っているが、防衛組織の隊員としては「怪獣化した原因」の方も危険視しなければならない。

「まさか、またギマイラが現れたのか?」

『だとしたら相当ヤバイですよ!』

吸血怪獣ギマイラ。ダロンともう一体の怪獣を従える凶悪な宇宙怪獣。こちらも、かつてはウルトラマンを追い詰めた強豪として登録されており、その厄介かつ残酷な能力には最大限の警戒を払う必要がある。

それは「生物を怪獣化させる」という能力。ダロンを蛸からタコ怪獣へと変異させ、従えていた「もう一体」は何と元人間だという。

『推測は後だ!今はダロンの侵攻を阻止する!』

『了解です!』

「了解、仕掛けます!」

隊長が居ない事とギマイラの存在。二つの点が線で結ばれ、最悪の結末として脳裏を過るが、今はダロンの神戸上陸を阻止しなければな

らない。駒門の号令で攻撃を開始する契のGホーク Type—A。それに続いて駒門と太刀薙のType—Bも戦闘機動に移った。

「こつちを見ろ！」

Type—Aの機動性を活かしてダロンに強襲を掛ける契。セイバーの物より洗練された最新型のレーザー機銃がダロンの胴体に狙いを定める。

——シユルルルアアアツ！

陸上での活動も可能となったダロンだが、基本的には巨大な蛸であり遠距離への攻撃手段を持たない。高圧電流による攻撃もするらしいが、それも触手を巻き付けた相手にしか使えない。つまり捕まらなければ良いのだ。

「太刀薙！」

『ハイハイ！センパイばつか見すぎだよお！』

『発射！』

伸ばしてきた触手を掻い潜り、ダロンの背後に抜けた契のType—A。それを追ってダロンも振り向くが、がら空きになった背中をType—Bが狙っていた。連射性能を落とした代わりに一撃の火力が大幅に上昇している粒子ビーム砲が光を放ち、ダロンに大きなダメージを与えた。

——キャシャアアアア!?

「まだ終わりじゃない！」

Type—Bに触手を伸ばした隙を逃さず、旋回から切り返してきた契のType—Aが追撃を行う。機銃からぶつ切りのレーザーを高速連射しつつ、機首部の単発式ビーム砲がダロンの頭部を狙い撃つ。

「チツ、さすがにタフだな・・・！」

『もう一度こちらのビームを命中させられれば！』

『なら俺に任せな！』

「っ、来たか」

『遅いですよ！荒島センパイ！』

「BURKセブンガー着陸します。ご注意ください」



警告アナウンスと共に着陸態勢を取ったドラム缶のお化け、もとい鋼鉄の巨人。着地と同時に長距離展開ブースターをパージし、パイロットの言葉と同じく「任せて！」とでも言いたげに両腕を振り上げる。

BURKの新たな切り札、BURKセブンガーが現着したのであった。

「っしやあ！防水加工もバツチリ決まってるからな！行くぜタコ野郎オツ！」

「張り切り過ぎて転ぶなよ」

『転ばねえよ！お袋かお前は！』

「いくら防水加工済みとはいえ精密機器の塊だからな、セブンガーは」  
『俺の心配じゃねえのかよ！』

などと漫才をしながらダロン目掛けてダツシユするセブンガー。荒島の言う通り完璧に防水されているらしく、派手に水飛沫を上げながら入水しても機能不全を起こす気配が無い。ドタドタバシャバシヤとGホークよりも騒がしいセブンガーに気付き、迎撃する構えを見せるダロン。先手を取ったのは触手のリーチが長いダロンだ。

『そっちから来てくれるなら！』

——キユウアツ  
!?!?!?

『オラアツ！』

セブンガーの腕に触手を絡ませるダロンだが、セブンガーのパワーを甘く見ていたようだ。締め上げて潰そうとしたのが災いし、逆に引っ張られてしまうダロン。電流で攻撃しようとするも遅く、強烈な左ストレートを顔面に受け、もんどり打って海面に叩き付けられた。

『見たか！セブンガーのパワー！』

「Type-Bの攻撃で撃破する手筈だと言ったろうが・・・水中に逃がしてどうする」

『あつ』

「こちらの射撃で追い立てる。今度は放すなよ」

『タコの掴み取り、ファイトですよ荒島センパイ！』

『おうよ！』

『待て！これは——』

このまま仕留められそうな雰囲気だったが、駒門の声が弛緩した空気を霧散させた。Type-Bの索敵システムが、BURK機とダロン以外の何かを捉えたのだ。共有された情報を確認した契は驚愕に目を見開く。

「周辺は封鎖したんじゃないのか！」

『公的な船舶と航空機は止めてますよ！多分、個人所有の船です！』

「どこの馬鹿だ！クソツ！」

空域・海域は封鎖しているにも関わらず、危険域に入り込んでいる船が一艘。直ぐにでも退避させるべきだが、あろうことかダロンがその船の方向に移動を始めてしまった。

『飛べ荒島！ダロンはこちらが全力で止める！』

『わーってるよ！』

『鶴千！』

「了解！」

船を守るべく全力でブースターを噴かすセブンガー。少しでもダロンの注意を逸らすべく集中砲火を掛けるGホーク。だがダロンは止まらず船舶への突撃を止めない。たかが個人用ボート一艘の何がダロンの琴線に触れたというのだろうか。

『こうした方が早いってなア！』

ボートを庇える位置ではなく、ダロンの進路に先回りする形でセブンガーを着水、もとい急降下させる荒島。強烈なストンプによって先を塞がれ、さすがに排除せざるを得ないと判断したのだろう。ダロンが再び身体を起こし、セブンガーに向き合って威嚇する。

「無茶をする・・・！活動限界は！」

『改良して伸ばしたつてのに！あと25秒だ！』

「チツ・・・！何としても——」

【射線上から退避されたし】

「ツ！荒島！船を守れ！」

『ああ？』

セブンガーの活動限界が来る前に仕留めようとした契だが、次の瞬

間Gホークに警告が届く。それと同時に高エネルギーを感知し、アラートを鳴らすGホークのシステム。咄嗟に荒島へ伝えられたのが幸いか。

彼方が瞬き、光の奔流がダロンを呑み込んだ。

「くっ……!」

『うおおああ!』

Type-Bの方にも警告は届いていたらしく、ほぼ同時に退避行動を取ったGホーク両機。荒島も危険を感じ取ったのか、セブンガーを障壁として船を余波と熱から守っている。

『ちよっ、今の何ですか?! 私達が居るのに!』

『どうやらアレが撃ったようだな……』

Gホークのシステムで大型の機影を捉えた駒門。その姿を見せつけるように、徐々に近付いてきた機体を目視した契。

「ドイツの新型か……」

神戸港を騒がせた事件は、異国の翼が終結させたのだった。



「BURKドイツ支部、ツェルベルス隊隊長のアルベルタ・フォン・ロートシルトだ。私の部隊が演習の相手を務めさせてもらう」

「同じくツェルベルス隊所属のカタリーナ・シュミットです。よろしくお願ひしますねえ」

ダロン撃破から一時間。BURK日本支部基地の格納庫に、普段は見かけない女性隊員と大型戦闘機の姿があった。

漆黒のロングストレートヘアを今は適当なポニーテールにまとめ、スラリとした体型と痛々しい顔の傷跡を堂々と晒している「アルベルタ・フォン・ロートシルト」。

クリーム色のくせ毛をショートボブのように揃え、アルベルタとは対照的に若干ふっくらとしている眼鏡を掛けた女性「カタリーナ・シュミット」。

そして、そんな二人がたった今降りてきた黒にダークレッドが映え

る大型戦闘機。それらに遅れて輸送機で到着した整備士ら等を加えたのが、日本支部との演習に臨むドイツ支部の部隊である。

「日本支部の駒門です。今回はよろしくお願いします」

「うむ。確か君は副官だったか？ワダツミ隊長はどこだろうか」

「それが・・・行方不明、でして」

「何？」

これから戦う相手にこんな事を言って良いのだろうか、と悩む駒門だが事実は事実。本来ルートシルトに挨拶するのは弘原海であり、駒門はポジションこそ副官に近いものの実働部隊の一隊員でしかない。そして行き先や目的も告げられていない為に行方不明としか説明できないのが現実だ。

「ふむ・・・こちらでも上層部に確認してみるとしよう。演習を前に姿をくらます人物とも思えんしな」

「あ、ありがとうございます・・・」

「何だ？意外か？」

「え、ええ・・・その」

「ふふっ、そう畏まるな。今回の演習は、完全にドイツ支部のお偉方がポーズの為に始めた事だ。私個人としては君達日本支部の隊員に思う所は無い。むしろ、この演習で学ばせてもらいたいと思っっているよ。幾度と無くウルトラマンと共闘した日本の防衛チームの力を、ね」

「ルートシルト隊長・・・」

「それに、こちらの隊員も日本支部には興味があるらしくてな？なあ シュミット・・・シュミットっ」

少なくとも現場レベルでのイザコザは回避できそうだと、とルートシルトの人となりに関心している駒門。そして日本支部に興味津々だという部下を呼ぶルートシルトだが、当のカタリーナは控えていたルートシルトの後ろから姿を消している。視界に捉えていたはずの駒門も、いつの間にか居なくなっていたカタリーナを探す。

「このセイバー！一見は通常仕様ですが改良していますねえ！詳細を教えてください！」

「い、いや・・・あのお・・・」

「あれは・・・」

「まったく・・・」

ドイツの新型近くから、いつの間にもやら日本支部の隊員が搭乗するセイバーの前に移動していたカタリーナ。そのセイバーを整備していたスタッフに詰め寄り、個人の癖に合わせたカスタマイズの詳細を聞こうと鼻息を荒くしている。そしてその整備士はカタリーナの荒ぶる熱意を間近で受け、ドン引きしていた。

「すまん・・・シユミットは見ての通り機械好きなんだ。度を越した」

「そのようですね・・・」

「駒門さん」

そこに加わったのは契。Type-Aの帰還とセブンガーの回収を終わらせ、機体搭乗時の装備から着替えずにそのまま来たようだ。ロートシルトと新型に向ける視線が厳しい所からするに、先程ダロンを撃破した兵器についての文句だろうか。駒門はまた胃痛を感じていた。

「君は？」

「日本支部の鶴千です。ちょうど良かった、一つ確認したい事があります。ドイツ支部ツエルベルス隊長」

十中八九そうだ、と察した駒門。胃痛に加えて頭痛まで併発したような気がする。

「あの場には民間の船舶がまだ居ました。その退避を待たず、その新型の高出力武装を使用した判断についてお聞かせ願いたい」

「直撃誤射しなければ被害は無いと判断した。それに、防御力に優れた例のセブンガーも居たしな」

「性急過ぎたのでは、と聞いているのですが」

「守りながらでは逆に被害が出るからだよ。あの場合では一刻も早い撃破が求められる」

「ですから！」

「随分とお優しくなったみたいね？」

突如、別の声が響く。契でなければロートシルトでもなく、駒門や

カタリーナでもない。ましてやセブンガーが巻き込まれかけたと文句を言いに来た荒島でもない。その声の主は、新型のコックピットから降りてきた。

「腑抜けた、とも言えるかしら」

「ヴォルフ。ツルセ隊員は人命救助の重要性について話している。彼の考えも間違いではない」

「・・・実愛、なのか？」

「久しぶりね、ケイ。あなたなら隊長の判断に賛同してくれると思っただけだ。残念だわ」

ロートシルトと二人の部下が搭乗し、三名で運用されるドイツ支部開発の新型。「BURKケルベロス」から降りてきた最後のパイロット、「ミア・ヴォルフ」。その顔に見覚えのあった契。この二人の因縁は五年前に途絶え、そして今再び交わりつつあった。

## 招く者、拒む者【中編】

好き、とは違う感情だった。視界に映ると目で追うくらいには気になる男の子、つて感じの。それを一目惚れって言うんだよ〜とりナは言うけれど、正直違うと断言できる。恋愛というより同族意識に近いモノだったから。

「俺は契。鶴千 契、よろしくな」

初めて会ったのは14歳の時。私がまだ日本に住んでいた頃に偶然出会った。当時の防衛組織はお飾りも良い所で、今のようにはセイバーのような安定した性能の量産機やケルベロスのような新型も無い、税金泥棒と呼ばれても仕方ない軍隊モドキだった。

「お前も、だよな」

でも、そんな事なんてお構い無しに怪獣は現れる。平和ボケした人類に自らの存在を刻み込むように、自分達だけの豊かさを享受しようとした人類を裁くように。もちろん、その頻度は今と比べ物にならないくらい少ない。

「その・・・何だ、辛いよな」

それでも被害が出ない訳じゃない。私は怪獣に父さんを殺された。私だけじゃない、他にも家を壊されて行き場を失った人や私と同じように家族を殺された人も居る。契はその中の一人だった。聞けばお姉さんを目の前で食い殺されたらしい。

「月並みな言葉だけど、お互いに頑張ろう。残された俺達は、前を向くしか出来ないんだ」

私と同じ年なのに、強い子だなと思った。普通、目の前で身内を食われればトラウマになるのは確実だ。なのにケイは泣く事も怯える事もせず、ただひたすら前を向こうとしている。人によっては身内の死を無視する冷たい奴だ、と取るだろう。けどケイは違うと知っている。

「俺は防衛組織に入る。たとえお飾りだとしても、怪獣を見付けて殺すのに一番手っ取り早い位置に行ける」

涙も恐怖も、全て怒りに変えて燃やし尽くす。それが私の知るケイ

だ。現に復讐を原点としながら、外星調査のメンバーとして選抜されるまでに到っている。立ち塞がる全てを討つ鬼神。その過程で何を犠牲にしても敵を倒すのがツルセ ケイという男だと――

「あの場には民間の船舶がまだ居ました。その回避を待たず、その新型の高出力武装を使用した判断についてお聞かせ願いたい」

思っていたのに。

「随分とお優しくなつたみたいね？」

なら私が代わってあげる。

「・・・実愛、なのか？」

もう奪われるだけの「灰幸 実愛」は居ない。ここに立っているのは「ミア・ヴォルフ」なの。



カツカツと靴音を響かせながら日本支部基地の廊下を歩く女性。パイロットスーツから制服に着替えたミアだ。日本支部と合同で当たる事になった件のブリーフィングまで僅かな休息が与えられたのだ。ロートシルトが配慮したのか、親友のリズことリーゼロッテと同室であり、今はその部屋に向かっている所らしい。

「・・・っと」

「むっ」

格納庫で契と再会し、確執を生んでしまったのを多少は気にしているミア。苛立ちが歩き方に表れ、やや早足になっている。その矢先、曲がり角で誰かにぶつかりかけてしまう。ギリギリの所で互いに気付き、衝突は避けられたが。

「女の子・・・？」

「？」

白髪に赤い瞳。服装こそ年相応の少女らしい水色のワンピースだが、纏う雰囲気は何処か人間離れた不思議なモノだった。ミアを見上げながら可愛らしく小首を傾げる少女の名はムム。現在BURK日本支部基地で保護されている異星人の子供だ。



「怪我は無い？」

「ん、げんき」

「そう」

「ムムー？」

「ママー！」

そういえば日本支部に異星人の親子が保護されたのだったか、とミアが記憶を探り当てたのとムムを呼ぶ声が聞こえたのは同時だった。自身を呼ぶ声に反応し、トテトテと声の主の元へと駆けていくムム。その先にはムムと同じく青と水色を基調とした地球製の衣服を纏う女性が居た。

「――、――？」

「――！」

血縁関係である事がよく分かるムムと女性。ミアが聞いた事のない言語で楽しそうに会話をしている。

（親子、か）

ほんの僅かに黒い感情が沸き上がる。自分は怪獣と異星人に家族を奪われたのに、この異星人は地球人に守られて今を生きている。目の前の親子がミアの家族を殺した訳ではないと理解は出来ている。そういう物だと受け入れる術も磨いてきた。そして、被害者だったこの親子に地球から出ていけ、さもなければ死ねと言うほど落ちぶれてもいない。あくまでミアが討ちたいのは、人にとって害となる怪獣しかり異星人なのだ。

「――。あの」

「っ、何か？」

「ムムがご迷惑をおかけしていないかと・・・」

母親らしき女性が不安げな表情で問いかける。随分と流暢に話すものだ。恐らく相当必死に学んだのだろう。

「いや、特には」

「そうですか」

「――！」

ホッと胸を撫で下ろす女性。ムムと呼ばれた少女が不満を露にし

ながら女性に抱き着いた辺り、ほら迷惑なんて掛けてないでしょ？とでも言ったのだろうか。

「では、これで」

「はい。頑張ってください」

「ばいばい」

どうにかどす黒く変色しかけていた感情を抑え込み、異星人の親子と別れるミア。これ以上あの場に居れば余計な事を口走ってしまいそうだった。

(異星人は・・・敵、なんだ・・・)

ミアの胸中は曇天だった。



「日本支部とドイツ支部の合同作戦の指揮を取らせてもらうルートシルトだ。よろしく頼む」

ミアとムム親子の邂逅から少し経って。日本支部基地ブリーフィングルームに、日本・ドイツ両国のBURK隊員が集められていた。大型モニターの横に立ち、一応の指揮官となった事を宣言したのはドイツ支部のルートシルト。その逆側には日本支部の駒門が立っている。

「今回、合同演習を中止し作戦行動となった理由は一つ。日本支部のワダツミ隊長が行方不明となり、同時に重要な調査が必要となったからだ」

そう切り出したルートシルトの言葉に、主に日本支部の面々がざわつき出す。確かに姿が見えなかったが、明確に行方不明と認定されたのが少なからず衝撃だったのだろう。

「諸君も知っての通り先程ダロンが出現、ドイツ支部の協力もあつてこれを撃破した」

「ダロンは最初の個体が出現して以降、今日に至るまで同種の出現は確認されていなかった。それは誕生の経緯がやや特殊な事に起因する」

「ギマイラですねえ？」

駒門とロートシルトの言葉にカタリーナが反応する。そうだと返したロートシルトが続きを話し始め、駒門が補足するようにモニターへ情報を映す。

「ドキュメントUGMの情報によれば、このギマイラの特異能力によって変異した蛸がダロンだ。幸い当時のUGMとウルトラマンによって殲滅され、細胞の飛散や遺伝による固有種化もなかったが」

「そのギマイラが再び現れた可能性が出てきた」

今度はドイツ支部の隊員達からも驚きの声がかかる。元々は宇宙怪獣であるギマイラの同種が、いつ地球に飛来していたのだろうか、と。

「ワダツミ隊長は、数日前から住人の様子がおかしいという通報のあった集落を調査していた。それがここだ」

ロートシルトの説明に合わせて画像を切り替える駒門。映し出されたのは、ギマイラ再出現の可能性を高めるポイント。

「潮風島・・・」

かつてギマイラとウルトラマン80が激闘を繰り広げた場所、潮風島だった。偶然か、はたまた同種の残り香でも嗅ぎ付けたのか、場所が場所だけに上層部も弘原海のようなベテラン隊員を送り込まざるをえなかったのだろう。そして、ものの見事に蛇を出してしまった。

「護衛や観測チームと共に調査を進めており、少なくとも怪獣による被害は無いと判断されかけた所でワダツミ隊長の失踪だ。何かあったと考えるべきだろう」

「それに加え、潮風島の住人も何人か行方不明となっていると報告が上がってきている。ギマイラ再出現の可能性を考え、両支部による合同作戦を展開する」



「・・・」

『ミアちゃん大丈夫？具合悪いみたいだけど』

「大丈夫よ。ありがと、リナ」

『無理はしないでね?』

慌ただしく出撃準備が行われているハンガー。BURKケルベロスのコ・パイロット用操縦席にて、若干顔色の悪いミアを別の操縦席からカタリーナが心配していた。

(なんなの、この気持ち悪さ・・・まるで——)

あの悪夢を見ている時のようだ。

度々見る正体も原因も不明の悪夢。その悪夢にうなされた時と同じくらいに気分が悪い。本来ならばこのようなコンディションで戦闘機動を取るべきではないのだが、居る可能性の高い宇宙怪獣への憎悪と、契への対抗心がミアをコックピットに導いていた。

(大丈夫・・・私ならやれる)

『ツエルベルス隊、先行する。遅れるなよ?リーゼロッテ』

『わっ、分かっていますー!』

BURKケルベロスが飛び立ち、それを追うようにリーゼロッテとその部下が搭乗するBURKセイバーが発進していく。

『こちらも出撃する!』

『了解!ヘマしないでよ?オビー』

『そのセリフ、そっくりそのまま返してやるよ。Gホーク Type  
—B、出ます!』

「無事で行ってくれよ・・・Gホーク Type—A、出るぞ」

駒門のBURKセイバーが発進し、駒門の代わりに鎚打隊員が操縦を担当する事となったType—Bが続けて出撃する。そして弘原海をはじめとした面々の無事を祈りつつ、契のType—Aが飛翔する。

目指すは因縁の場所。魔の怪獣島再びとなるか。



『間も無く潮風島だ。各員、警戒を厳に』

BURK日本・ドイツ両支部の部隊が潮風島へと接近し、ロートシ

ルトが警戒を促した直後。

『っ！散開を！』

『狙われていますよお！』

Type-Bの太刀薙とケルベロスのカタリーナからほぼ同時に警告が飛ぶ。各機が編隊を崩して回避する中、ドイツ支部の一機にしてリーゼロッテの部下が搭乗するセイバーが被弾してしまう。

『くっ！よくも！』

『あの怪獣は・・・！』

森林地帯に隠れて電撃を放ったのは、ギマイラではない別の怪獣。だが、その姿を視認した一部の隊員達はギマイラの再出現を確信していた。電撃攻撃でセイバーを撃墜した下手人の左手は、鋭い鋏のようになっている。Type-Aのコックピットから確認した契も、苦々しくその名を口にした。

『ラブラスカ・・・！』

【人間怪獣】

その別名を聞けば悍まじさが伝わるだろうか。元が軟体動物だろうと推測できるダロンとは対照的に、哺乳類の面影を感じさせない姿をした怪獣。ギマイラの怪獣化光線により巨大な化物へと変異させられた「元人間」。それがラブラスカである。

「悪趣味な事をする！」

『全機、攻撃開始』

「っ、待ってください！アレは人間の——」

『元に戻したいなら倒すしかない、あなたも知っているはずよ。ケイ』  
無慈悲にも聞こえるルートシルトの号令。当時は打つ手が無くとも今の技術なら、と思案する契に対し、明確に冷たい声色で諫めたのはミア。怪獣化光線によって変異させられた者は、死亡する時にしか元に戻れない。その残酷な性質を知っているからこそ、今ならば、殺すしかない、と対立したのだが。

『ツルセ隊員、君の言いたい事も分かる。最悪の可能性として、あのラブラスがワダツミ隊長かもしれない』

ルートシルトの言葉に駒門が息を呑む。敬愛する上官をこの手で

討たなくてはならないかもしれない、という可能性。覚悟はしていたが、実際にその状況になったとしてトリガーを引けるか。

『まず動きを止めない事には始まらない。捕獲して試行錯誤するにも、潮風島を探し回るにしても、ラブラスが暴れていてはどちらも不可能だ。それに我々が倒れては意味が無いだろう?』

「・・・了解」

さすが叩き上げの隊長というべきか、目の前の状況に焦るしか出来ない自分と違い、その後にも視野を広げられるロートシルトの冷静さに契も納得するしかない。意を決してType-Aのトリガーに指を掛ける。

『再度通達する。全機、攻撃開始!』

各機にも開かれていた通信回線で契とロートシルトのやり取りを聞いていた隊員達。悩んでいるだけでは何も始まらない、まず動け、動きながら考えろというロートシルトの言葉に従い、それぞれが行動を開始する。



気分が悪い。

隊長の命令に思う所がある訳じゃない。むしろ、あのラブラスが潮風島を飛び出し、本土や他国にまで攻め入る可能性を考えれば撃破に賛成だ。

自分でも分からない。

今回の作戦に何ら不満は無いはずなのに。出撃準備をしている時から悪寒が止まらない。それでも、任されている火器管制は完璧にこなさなければ。もう少し、あと少しでラブラスを仕留められる。悔しいけれど、日本支部の練度とGホークというらしい新型の性能は想像以上に高かった。リス達の部隊も居るし、このまま押し切れるはずだ。

っ、まただ。また背筋に冷たいモノが落ちた。これじゃ本当にあの悪夢だ。言い様の無い悪寒、覚める事のできない悪夢。下手をすれ

ば、助けると叫んでしまいそうだな。  
何かが・・・来る・・・？



——ギシャアアアアアツ!!!

「とうとう出てきたか!」

『ギマイラー：できれば居ない方に賭けたかったんだけどな!』

ラブラス単独で合同部隊を相手取るのは厳しいと判断したのか、はたまた最初の不意打ちでしか敵を撃墜できていない事に苛立ったのか、遂にその姿を見せた吸血怪獣ギマイラー。一対多はこう捌く、と言わんばかりに吸血怪獣と名付けられた所以である触手状の舌を伸ばす。

『回避!』

「チツ!」

どのように操っているのか、触手状の舌は分かれた一本一本が生きているようにセイバー、Gホーク、ケルベロスを狙って動く。そこにラブラスの電撃まで加わり、日本支部とドイツ支部のセイバーが機はず撃破されてしまった。

「連携・・・いや、統率が取れているというべきか」

Type-Aの機動性と自身の技量を存分に活かし、怪獣達の連携攻撃を何とか凌いだ契。同じく被弾を免れた編隊を睨む怪獣にレーザーの銃撃で応えていた矢先。

『なっ、なんなのこの数値・・・空間に異常!何かが来ますよお!』

ケルベロスのカタリーナから警告が飛ぶ。それとほぼ同時にGホークのシステムも、カタリーナの言う空間の異常を捉えた。

「何だアレは・・・!まさかヤプールか!?!」

異次元ヤプール。かつて地球を防衛していたTACとウルトラマンエースが激闘を繰り広げた、異なる次元からの侵略者。一度はエースによって討たれたらしいが、生き残りか怨念か、その後何度もウルトラ戦士や防衛チームの前に現れては置き土産とも言える「怪獣

を超えた怪獣」である【超獣】を繰り出して来る。空間レベルで干渉してくる存在と言えば、で真つ先に思い浮かぶのがヤプールなのだ。そんな傍迷惑な存在が、ギマイラとラブラスに加わったら手に負えなくなる。どう捌くか、はたまたメデイスへ変身するか、混沌と化していく戦場の突破口を見出だそうとしていた契だが――

『ひっ……あ、ああ……いや、やめて……来ないでえ！イヤアアアア!!!』

『ミアちゃん!?』

『どうしたヴォルフ! くっ!』

突如としてケルベロスに異変が起きる。厳密にはパイロットの一人であるミア・ヴォルフに。

『ミア!? どうしたのよ! しっかりして!』

「実愛! こちらType-A! ケルベロス、どうした! 何があった!」ドイツ支部の戦友でもあるリーゼロッテと旧知の仲である契が状況を確認しようとするが、自分達もギマイラとラブラスの波状攻撃に曝され上手くフォローが出来ない。

「ロートシルト隊長! 一度撤退を!」

『だが!』

『間も無くセブンガーが現着します!』

『これは……ウルトラアキレスの反応も検知! 来てくれたのね!』

ツエルベルス隊を下がらせ、日本支部隊とリーゼロッテ隊での作戦続行を進言する契。「奥の手」を使ってでも戦力低下を避けようとするロートシルトだが、長距離展開ブースターの整備が完了したセブンガーが近い事を駒門が伝え、更にType-Bの太刀薙がウルトラアキレスの接近を捉えた。

『やむを得ないか……ここは任せ――』

ロートシルトが一時撤退を決断し、潮風島から離脱する軌道を取った瞬間。

【それ】は現れた。

「何っ!?!」

『ロートシルト隊長!』



不気味な「空間の穴」と形容できるそれから複数の触手が伸び、ケルベロスに巻き付いたのだ。ロートシルトの意識が、穴から逸れたほんの一瞬を狙い澄ましたかのように。穴から最も近かったから、という単純な理由だけではない、明確な意思を持っているかのように伸びた触手は、その細い見た目に反した力でケルベロスを穴へと引き摺りこもうとしている。

『くっ……何て力だ！シユミット！』

『駄目です！完全にパワー負けしてます！』

『ああ、ああああ！いやあ！』

「クソッ！」

ケルベロスを振り回しながら穴へと戻っていく触手。下手に狙えば誤射しかねない為、援護に動けない。触手の大元を討つしかないと判断した契は、ギマイラの舌触手を強引に振り切り空間の穴へと操縦桿を切る。

『ちよっ、鶴千センパイ!？』

『戻れ鶴千！無茶だ！』

「ここは任せます！」

太刀薙と駒門の声を置き去りにしてワームホールへと突入する契。最後に契の視界に映ったのは、焦ったように手を伸ばすアキレスとセブンガーの姿だった。

(ギマイラは任せるぞ嵐真、荒島)



「つく……なっ、何だこれは……」

永遠に続いているような闇を抜け、突入したワームホールと同じような穴から飛び出した契のType-A。そこで視界に映ったのは、この世の物とは思えない景色だった。無論、悪い意味で。

「っ、ケルベロスは！」

『ツルセ隊員!?何故——くうっ、すまない！援護を頼めるか!』

晴れ間どころか太陽の暖かな気配すら感じられない黒雲に覆われ

た空の下を、先にワームホールから抜け出ていたらしきケルベロスが飛んでいる。絡み付いた触手に引かれ、どうにか滞空を維持しているだけのようだが。

「了解！」

『これは!? 巨大な生命反応! 何か居ます!』

「本体か!」

触手にレーザー機銃の照準を合わせた瞬間、ケルベロスのカタリーナが「生命反応」を捉えた。触手が伸びている先、仄暗い海から顔を出している大きな岩礁の陰。まるでメインディッシュが運ばれてくるのを待っていたかのように、異形がその姿を現した。

「なん、だ……アレは。怪獣、なのか?」

『何と醜悪な……』

『ひっ、あああ……く、来るなあ! 来ないで!』

契とロートシルトが驚愕したのはそのグロテスクな見た目。珊瑚と岩塊に貝類を掛け合わせ、蛸か烏賊のような触腕が生えるように備わり、恐怖に歪んだ人面が叫んでいる顔を複数張り付けたような姿。その人面からケルベロスを拘束している触手を伸ばす怪獣は、醜悪かつ異形としか形容しようがない。

そしてその怪獣から少しでも距離を取るように、操縦桿からも手を離し、シートに身体を食い込ませて泣き叫ぶミア。彼女の不調の原因は間違いなく異形の怪獣だろう。

『本体を狙え! その方が早い!』

「それでは!」

『ケルちゃんのパワーならまだ抵抗できますよお!』

戦意喪失してしまったミアの分まで機体制御に奮闘しているカタリーナ。ロートシルトもメインの操縦者として触手に抵抗しつつ、照準が合う一瞬を狙っている。最悪に近い状況でも諦めない二人を助ける為、契もGホークを異形の怪獣へと向ける。

「まずはケルベロスを放してもらおう!」

レーザー機銃と単発式ビーム砲を一斉射しながら怪獣へ突撃する契。真正面から向かってくるGホークを絡め捕らんと、ケルベロスを

捕縛している触手とは別の触手を叫び顔の口から新たに伸ばす怪獣。  
「っ、おとおっ！」

——キシエアアアア!!!

ほぼ相討ちの形。触手の大元である口のような部位にレーザーが吸い込まれ、衝撃と痛みでケルベロスの拘束が弛む怪獣。契もGホークを狙った触手は全て回避するも、Gホークの軌道を読み、置くように噴出した黒い霧は躲しきれず被弾してしまう。

『ツルセ隊員！』

「くっ！まだ、だあっ！」

一見して黒いだけの霧にどんな破壊力があるのか、Gホークの左翼が半ば大破している。岩礁への不時着コースを辿るGホークのコックピットで、契はジョーカーを切った。



「つうう……ひっ……」

ようやく自由を取り戻したケルベロスのコックピットで、未だ恐怖に囚われ踞るミア。そんな彼女の耳にロートシルトとカタリーナの驚いたような声が僅かに届く。

『ウルトラマン……？』

『えっ、ええっ!? ツルセ隊員のGホークから……どういう事ですかあ  
』！』

「……け、い？」

闇に覆われた異形の海に、一筋の光が差す。



『……ハッ』

ケルベロスを一瞥し、正面の怪獣に視線を向けるメデイス。睨み合いは一瞬、ファイティングポーズを取り駆け出すメデイスと悍ましい叫び声を上げながらそれを追う怪獣。

『シユアツ！ダアツ！』

先手を取ったのはメデイス。触手に捕まる訳にはいかないと、怪獣を中心として円を描きながら走り、光弾を左手右手と連射する。

——ギアアアアツ！

(硬いな・・・！)

放った光弾は全て命中するも、ダメージが命に届いている様子が全く無い。触手は比較的軟らかいようだが、死んだ珊瑚礁と岩塊のような本体の硬度は高く、光弾程度では怯ませるのがせいぜいらしい。

(なら至近距離で！)

『シユアアアツ！』

ならば接近戦だと怪獣へ向かっていくメデイス。その左手からやや小型のバリアを発生させ、右手にはウルトラスラッシュをアイドリイングさせるように留めている。怪獣も、そう易々と接近させるつもりは無いのか触手を伸ばしてメデイスを迎撃する構えだ。

(今だ！)

『ハッ！』

上半身はバリアによって守られており、触手は伸びた先から弾かれ逸れていく。となると狙えるのは下半身、足元なのだが、それこそ契が狙っていた行動。新たに伸びてきた触手と、弾かれてなお背後から迫る触手が一ヶ所に集中した瞬間、メデイスが飛ぶ。

『アエヤアアアツ!!!』

——ギエアアツ!?

足元に集中した触手を跳躍によって回避し、右手に留めていたウルトラスラッシュを放つ。さすがに切断特化の光刃は無力化できず、悲鳴のような声を上げながらよろめく怪獣。初めてまともなダメージが通ったようだ。

(仕留めるには程遠いか)

続く攻め手をどうするか着地しながら思案する契だが、メデイスの物ではない光弾が怪獣に着弾しその発射元を振り返る。

『援護する！』

『何とかやってみますよお』

コントロールを取り戻したケルベロスからの援護射撃だ。それを確認したメデイスは、即座に怪獣へと視線を戻し再び跳躍。今度は怪獣に向かって跳び、渾身の膝蹴りを見舞う。

——グブアツ

奇っ怪かつグロテスクな見た目も手伝って内臓器官がどこにあるのか、そもそも内臓が存在するのか不明な怪獣だが、ウルトラスラッシュからケルベロスのビーム、飛び膝蹴りと立て続けに強烈な攻撃を貰い苦悶に呻く。

(まだ終わりにじゃない！)

『ダアツ！ドウラア！』

更に追いつ打ちのボディブローを入れ、コンボ締めとばかりに契お得意のケンカキックを叩き込む。崩れた体勢ではキックの衝撃を殺し切れず、後方に吹き飛びながら転がる怪獣。引き戻す途中だった触手が側を通り過ぎる瞬間それを勢いよく掴み、怪獣を強引に振り回し始めるメデイス。

(このまま——っ!?)

二回、三回と大きく回しもう一度と力を込めようとした時、今まで気付かなかった異変が牙を剥いた。